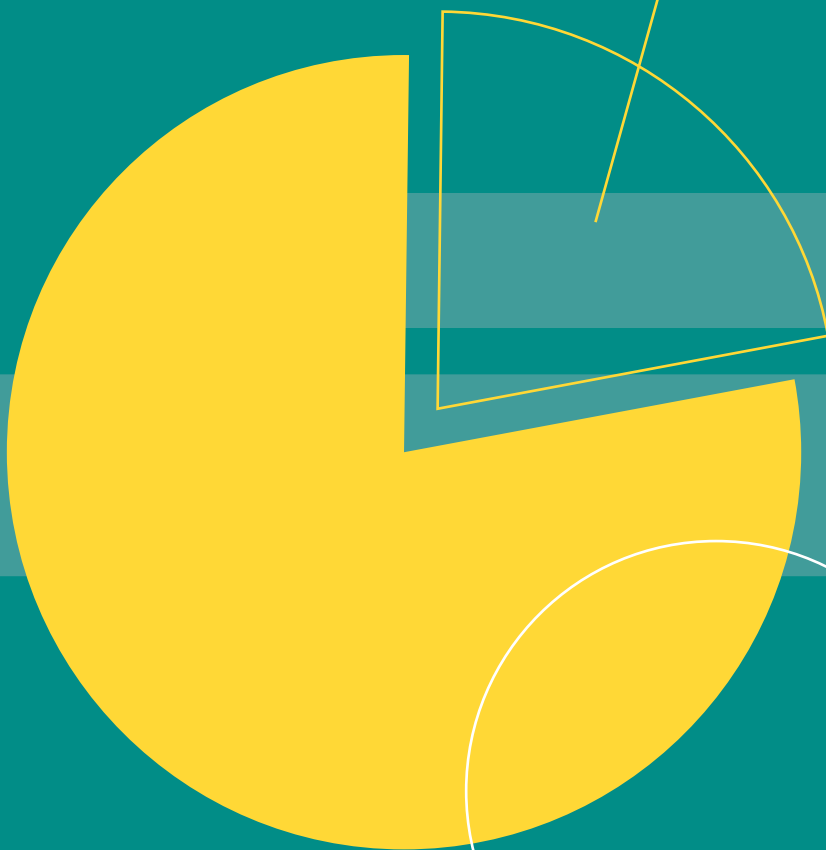


調査報告書 2025

デートDVと予防教育の実態と意識

～教員・中高生調査～



〈目 次〉

I. 問題と目的	1～2
II. 方法	
1. 教員調査	3～5
2. 中高生調査	6～7
III. 結果	
1. 教員調査の結果	8～26
2. 中高生調査の結果	27～43
IV. 考察	
1. 学校での「生命の安全教育」と デート DV 予防教育の実態と課題	44
2. デート DV の被害・加害実態	45～46
3. 性的同意とデート DV についての教員と中高生の意識	46～47
4. 今後の課題	47～48
V. 引用文献	49～50

1. 問題と目的

デート DV とは、恋愛関係にあるカップル間に生じる暴力のことである。内閣府（2024）では、「交際相手がいた（いる）」という人（2,112 人）に、身体的暴行、心理的攻撃、経済的圧迫、性的強要について、当時の交際相手から被害を受けたことがあるかを尋ねている。同調査によれば、当時の交際相手から先の 4 種類の暴力のうちのいずれかの被害を受けたことが「ある（計）」が 18.0%で、女性が 22.7%、男性が 12.0%となっている。年齢階級別にみると、18～19 歳の女性は 13.3%、男性は 12.5%であり 10 代の男女においても被害が決して少なくないといえるが、18 歳未満については調査されていない。片瀬（2019）によれば中学生でも既に女子で 29.2%、男子で 27.0%がデートをした経験があるため、18 歳未満を対象にデート DV の実態を把握する必要がある。認定 NPO 法人エンパワメントかながわは 2016 年に中学生・高校生も対象としたデート DV 実態調査を実施し、その結果を「デート DV 白書 VOL.5」（2017）にて報告したが、それから既に 10 年近くが経過した。その間、2020 年の新型コロナウイルス感染拡大に伴い DV リスクの増大が懸念され、盛んな啓発活動と、相談・支援体制の拡充が図られた。また、同年「性犯罪・性暴力対策強化のため関係府省会議」にて「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」が決定された（内閣府）。この方針を受け、文部科学省では内閣府と連携し、児童・生徒が性暴力の加害者、被害者、傍観者にならないための「生命（いのち）の安全教育」の教材及び指導の手引きを作成した。これらの教材は「幼児期」、「小学校低・中学年」、「小学校高学年」、「中学校」、「高校」、「高校卒業直前・大学・一般」というように発達年齢ごとに作成され、文部科学省の HP から誰でもダウンロードすることが出来るようになっている。このような時代の変化をふまえると、デート DV の実態を把握するために現時点で再び調査を行う必要があると考えられる。

中学生・高校生にも生起しているデート DV であるが、その予防には学校が大きな役割を果たす。欧米では 1980 年代にデート DV 予防・防止教育が実施され、1990 年代頃からその効果検証も行われるようになった。デート DV 予防・防止に有効な教育の内容が検討され、知識や態度の変容、スキルの獲得などの効果が得られている（Cornelius & Resseguie, 2007）。同様に性暴力防止プログラムも学校の通常のカリキュラムとして大規模実施されており（Rispen, Aleman, & Goudena, 1997）、その効果検証に関する研究も行われている。国内においても調査研究によりデート DV の実態が明らかになると並行して、民間団体や NPO 法人がデート DV 予防教育に先駆的に取り組んできており、このような活動がデート DV の知識を高め、デート DV の予防に貢献してきた（赤澤, 2022）。しかし、国内では欧米のように学校において組織的かつ標準的にデート DV 予防教育や性暴力防止プログラムが実施されているわけではなく、むしろ教育現場での性的な内容に関する教育については抵抗が未だに大きい（石川・土田・中澤, 2016）とされている。中澤（2019）は、性教育を幅広く、かつ、多く受けている高校生男女は、そうでない高校生男女より有意に性知識が多かったとする一方で、知識の高さと学校を性交渉の情報源とすることや性に対する自己決定的態度には関連が示されなかったと報告している。この

ことから、同研究では、日本の学校における性教育の内容に偏りがあるという指摘もされている。下村他（2021）によると、学校の保健教育では、性感染症のしくみや妊娠・出産等について取り上げている学校は70%以上あるが、異性等の交際やデートDVについて取り上げている学校は54.1%であった。同研究では、デートDVの予防教育を行う上で感じる教員の課題として、指導に使える教材の不足や自分自身の知識の不足が挙げられていた。先述した「生命（いのち）の安全教育」はそれを克服するものと期待できるが、学校現場でどれだけ実施されているかは不明である。「生命（いのち）の安全教育」やデートDV予防教育といった性教育の実施の現状と課題について改めて調査する必要があるだろう。

それらの教育を立案し実施する教員の、性に対する態度やデートDVに関する知識は、性教育の実施や内容に大きく影響を与え、さらに普段の学校生活を通して潜在的に生徒に伝達され影響を与える。折しも、2023年7月より刑法及び刑事訴訟法の一部が改正され、性的同意のない性行為は「不同意性交等罪」「不同意わいせつ罪」として処罰されることとなった。しかし、この前提となる性に対する自己決定的態度としての性的同意については、一般的に理解されているとは言い難い状況である。また、デートDVにあたる行為も、「つきあっていれば当たり前」、「愛の証」などと捉えられ、暴力だと認識されにくい特徴がある。したがって、今後のデートDV予防教育を考える上では、教員個人の性的同意やデートDVに関する認識について明らかにする必要がある。

以上のことから、本研究の第一の目的は、「生命（いのち）の安全教育」およびデートDV予防教育の実施状況と課題を明らかにすることである。そのため、全国の小学校・中学校・高等学校の教員を対象とした調査を行う。第二の目的は、中学生・高校生を対象にデートDV実態調査を行い、現状を把握するとともに、2016年の調査結果と比較することである。第三の目的は、教員と中高生双方の、性的同意およびデートDVの認識を検討することである。

日本ではセクシュアリティに関する研究は限られており（Akazawa, 2011）、上述したように国内の学校において性的なことを取り扱うことにも抵抗が大きい。そのため、性的な内容を含む実態調査の実施も難しい面があり、特に学齢期にある10代の実態については明らかにされていない部分が多い。しかし、10代で既に交際が始まっていることを考えると、海外のようにデートDVについての実態を明らかにし、対策について検討する必要があるだろう。そういった意味において本調査は国内で実施されている教育の実態やデートDVの現状を明らかにすることができると思う。そして、本調査の結果をふまえ、今後のデートDV予防や性教育について提言できると考えられる。

II. 方法

1. 教員調査

(1) 調査対象

文部科学省が公開している学校コード一覧（2024年5月1日時点確定版）に掲載された、全国の小学校（18,693校）、中学校（9,801校）、高等学校（4,827校）から、それぞれ任意の500校計1,500校を抽出した。今回の調査では、義務教育学校、中等教育学校、特別支援学校は含まない。任意の500校の抽出に際しては、対象とする小学校、中学校、高等学校それぞれにエクセルのランダム関数（RAND関数）で発生させた乱数を昇順に並べ、1から500番目までを抽出した。

(2) 調査時期

2024年11月に実施した。

(3) 調査手続き

抽出した1,500校に対して、宛先を学校長、保健主事、養護教諭の連名としたハガキにより調査主旨の説明及び回答方法を説明した。回答方法は、QRコードを読み込み、Googleフォームへの入力を依頼した。調査では、メールアドレス等個人に繋がる情報を取得しなかったため、調査結果の希望がある場合は別のフォームに連絡先を記載する旨依頼した。2024年10月29日に全対象校にハガキを発送し、12月1日午前0時00分に回答を締め切った。

(4) 調査内容

1) 基本情報

勤務校の種類（小学校、中学校、高等学校）、勤務校における立場（養護教諭、養護教諭以外の保健主事、管理職、その他（自由記述））、勤務校のある都道府県について尋ねた。

2) 「生命の安全教育」に関する質問

「生命の安全教育」に関する質問は、下村他（2021）を参考に質問項目を作成した。

①「生命の安全教育」の実施状況

現在、所属している学校で文部科学省が教材を作成した「生命の安全教育」を行っているかどうかについて、「している」「していない」「わからない」の3件法で尋ねた。実施している場合には、指導機会（保健体育・家庭・理科・公民・福祉・看護・総合的な学習の時間・学年集会・全校集会・学校保健委員会・その他自由記述）と、指導者（教科担任・養護教諭・保健主事・生徒指導担当教諭・学級担任・外部講師）についてそれぞれ複数回答方式で尋ね、さらに指導上の困難について自由記述方式で尋ねた。

②「生命の安全教育」の必要性

「絶対に必要である」「ある程度必要である」「あまり必要ない」「全く必要ない」の4件法で尋ねた。また、そう答えた理由について自由記述で尋ねた。

③勤務校で「生命の安全教育」を行う際の課題

複数回答方式で尋ねた。選択肢は次の通りである。

- ・「生命の安全教育」を教えることに対して教職員の理解がない
- ・子どもの実態やニーズが分からないので指導できない
- ・自分自身に知識がない
- ・適切な教材がない
- ・相談できる専門家がない
- ・指導するための予算がない
- ・指導するための時間がない
- ・その他（自由記述）

3) デート DV 予防教育に関する質問

①デート DV 予防教育の実施状況

現在所属している学校で、デート DV について指導しているかどうかを「している」「していない」「わからない」の3件法で尋ねた。実施している場合には、上記の「生命の安全教育」の場合と同じ要領で、指導機会と指導者についてそれぞれ複数回答方式で尋ねた。

②デート DV に関する指導の必要性

「絶対に必要である」「ある程度必要である」「あまり必要ない」「全く必要ない」の4件法で尋ねた。また、そう答えた理由について自由記述で尋ねた。

③勤務校でデート DV の指導を行う際の課題

上記の「生命の安全教育」の場合と同じ選択肢を用いて、複数回答方式で尋ねた。

4) 性的同意の認識に関する質問

性的同意に関する以下の質問項目 10 項目を独自に作成して、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の5件法で尋ねた。

1. デートしているとき、いきなり手をにぎってもかまわない
2. デートに行くということは、キスしても良いということである
3. 相手が手をにぎるのを嫌がらなかったら、キスしても良いというサインだ
4. つきあっている相手なら、自分がさわりたいくなったら相手の身体にさわってもかまわない
5. つきあっている相手にさわられたら、断るのは失礼だ
6. つきあっている相手がキスしたがっているのに断るのは、失礼だ
7. 相手の部屋でふたりきりになるということは、キスしても良いということである

8. つきあっていれば、手をにぎったりキスしたりするのは当然だ
9. 互いに成人していれば、キスの際に毎回相手に許可を取る必要はない
10. 一度キスした相手には、キスの際に毎回相手に許可を取る必要はない

5) デート DV の認識に関する質問

赤澤他 (2021) の項目を用いた。身体的暴力 1 項目 (けがをしない強さで叩く)、性的暴力 1 項目 (いやがっているのに身体的接触を求める)、精神的暴力 3 項目 (相手を否定したり、意見を認めなかったりする/別れるなら自分は何をしでかすかわからないという/交友関係や行動を見張るため相手のスマートフォンや携帯電話をチェックする) について、「全く暴力にあたらない」から「完全に暴力にあたる」までの 7 件法で回答を求めた。

(5) 倫理的配慮

調査依頼にあたり、回答は任意であること、無記名での調査であること、調査で得られた情報を研究以外で使用しないことを明記した。

個別の質問では、学校種別及び回答者の属性のみの収集とした。

回答は、Google フォームで実施し、回答結果のアクセスは限られたもののみとした。

(6) 利益相反

本研究に関連し、開示すべき COI 関係にある企業などはない。

2. 中高生調査

(1) 調査対象

関東・九州地方の中学校 2 校に所属する 256 人、関東・中部・九州地方の高等学校 5 校に所属する高校生 1,173 人の計 1,429 人に調査を依頼した。そのうち調査参加に同意し回答したのは中学生 224 人、高校生 741 人の計 965 人であった(調査参加率 67.5%)。分析参加者のジェンダーの内訳は、中学生が女性 100 人 (44.6%)、男性 120 人 (53.6%)、その他 3 人 (1.3%)、回答拒否 1 人 (0.4%)、高校生が女性 350 人 (47.2%)、男性 378 人 (51.0%)、その他 1 人 (0.1%)、回答拒否 12 人 (1.6%) であった。

(2) 調査時期

2024 年 11 月から 12 月に実施した。

(3) 調査手続き

調査参加者は、デート DV 予防教育を実施する学校に所属する中学生、高校生であった。予防教育を受講する前に、スタッフの説明によりスマートフォンまたはタブレット等で、QR コードを読み込んで回答するよう依頼した。調査は無記名で、回答は任意であり、途中で中止できることも明記した。

(4) 調査内容

1) 基本情報

年齢、住んでいる都道府県、性別について尋ねた。

2) 交際経験

交際経験の有無について、「ある」「ない」の 2 件法で尋ねた。

3) 暴力の被害・加害経験

2016 年実態調査と同じ項目を用いた。デート DV で起きる暴力を 5 つの種類(行動の制限、精神的暴力、経済的暴力、身体的暴力、性的暴力)ごとに 6 項目、合計 30 項目について被害および加害経験の有無を尋ねた。回答は「されたことがある(被害)」「したことがある(加害)」「されたことも、したこともある(被害・加害)」「されたことも、したこともない」の 4 件法であった。

4) 性的同意の認識に関する項目

教員対象調査と同じ項目を用いた。性的同意に関する 10 項目について、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の 5 件法で回答を求めた。

5) デート DV の認識に関する項目

教員対象調査と同様に、赤澤他(2021)の項目を用い、身体的暴力 1 項目、性的暴力 1 項目、精神的暴力 3 項目について、「全く暴力にあたらぬ」から「完全に暴力にあたる」までの 7 件法で回答を求めた。

(5) 倫理的配慮

学校長に対し、調査の主旨を説明し承諾を得た上で、生徒に対し以下のことを説明し実施した。

- ・調査は無記名で実施し、学校名や個人が特定されることはない
- ・調査への協力は任意で、協力しない場合でも学校生活に影響を及ぼしたり、不利益になることは一切ない
- ・調査で得られた情報は厳重に管理される

回答は、Google フォームで実施し、回答結果のアクセスは限られたもののみとした。

(6) 利益相反

本研究に関連し、開示すべき COI 関係にある企業などはない。

III. 結果

1. 教員調査の結果

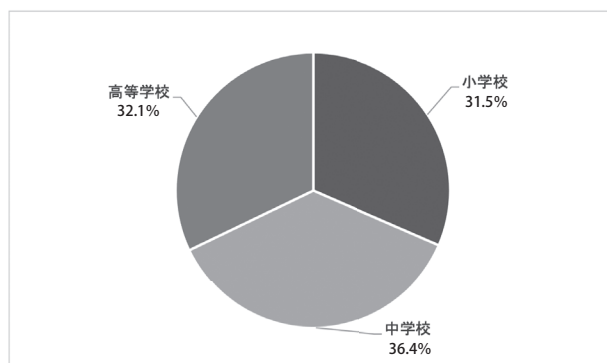
本調査では、Google フォームで回答のあったケースをすべて有効回答とした。有効回答は全体で165人であった。

(1) 回答者の属性

1) 回答者の勤務校の種類

回答者の勤務校の種類の内訳は、小学校 31.5%、中学校 36.4%、高等学校 32.1%で、おおよそ3分の1ずつであった。

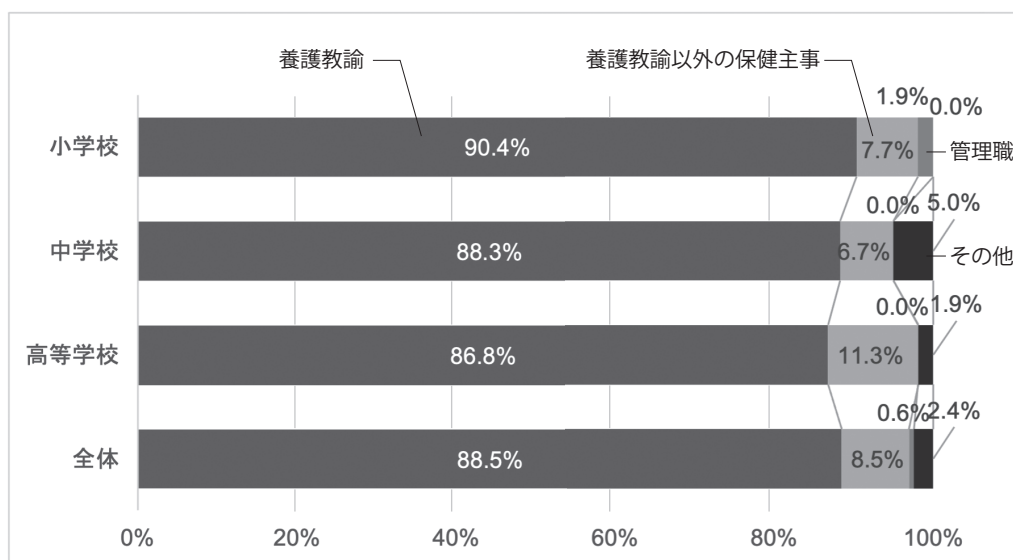
回答者の勤務校の種類 (N=165)



2) 勤務校における回答者の担当

勤務校における回答者の担当は、回答者全体で「養護教諭」が全体の88.5%と大半を占め、「養護教諭以外の保健主事」が8.5%、「管理職」が0.6%、「その他」が2.4%であった。

勤務校における回答者の担当 (N=165)



3) 回答者の勤務校の所在地（都道府県）

回答者の勤務校がある都道府県の分布は下記の通りである。

回答者の勤務校がある都道府県（N=165）

都道府県	度数	割合	都道府県	度数	割合	都道府県	度数	割合	都道府県	度数	割合
01 北海道	9	5.5%	13 東京都	10	6.1%	25 滋賀県	6	3.6%	37 香川県	0	0.0%
02 青森県	2	1.2%	14 神奈川県	2	1.2%	26 京都府	2	1.2%	38 愛媛県	1	0.6%
03 岩手県	2	1.2%	15 新潟県	3	1.8%	27 大阪府	8	4.8%	39 高知県	0	0.0%
04 宮城県	5	3.0%	16 富山県	1	0.6%	28 兵庫県	5	3.0%	40 福岡県	9	5.5%
05 秋田県	0	0.0%	17 石川県	3	1.8%	29 奈良県	2	1.2%	41 佐賀県	4	2.4%
06 山形県	3	1.8%	18 福井県	1	0.6%	30 和歌山県	6	3.6%	42 長崎県	5	3.0%
07 福島県	3	1.8%	19 山梨県	0	0.0%	31 鳥取県	0	0.0%	43 熊本県	2	1.2%
08 茨城県	7	4.2%	20 長野県	5	3.0%	32 島根県	3	1.8%	44 大分県	0	0.0%
09 栃木県	1	0.6%	21 岐阜県	4	2.4%	33 岡山県	4	2.4%	45 宮崎県	1	0.6%
10 群馬県	4	2.4%	22 静岡県	5	3.0%	34 広島県	7	4.2%	46 鹿児島県	2	1.2%
11 埼玉県	7	4.2%	23 愛知県	4	2.4%	35 山口県	3	1.8%	47 沖縄県	3	1.8%
12 千葉県	7	4.2%	24 三重県	3	1.8%	36 徳島県	1	0.6%	合計	165	100.0%

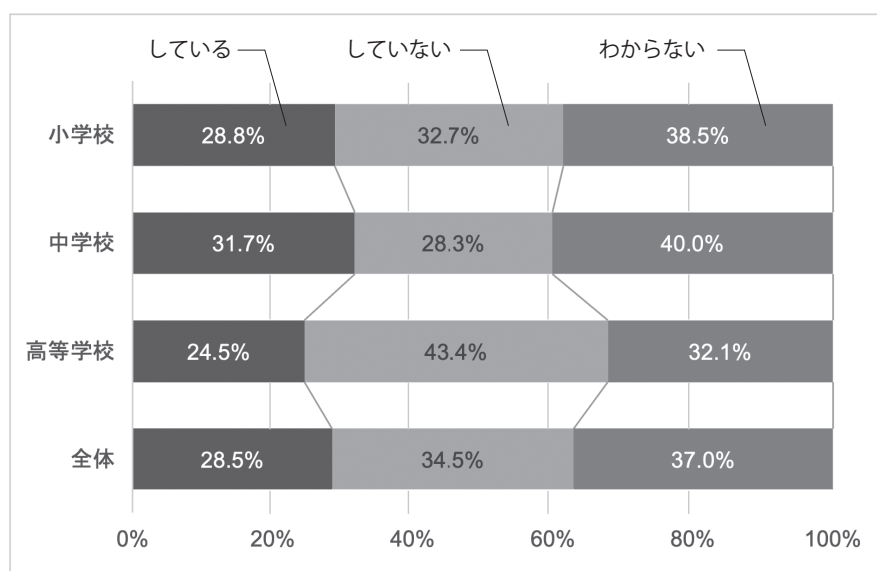
(2) 「生命の安全教育」

1) 「生命の安全教育」の実施状況

回答者が所属している学校で、文部科学省が教材を作成した「生命の安全教育」を行っているかどうかを尋ねたところ、全体では「している」28.5%、「していない」34.5%、「わからない」37.0%であり、実施状況を把握できている回答者の間では「していない」との回答が「している」を上回った。

学校種別にみると、「している」との回答は、割合が高い順に、中学校で31.7%、小学校で28.8%、高等学校で24.5%、「していない」との回答は、割合が高い順に、高等学校で43.4%、小学校で32.7%、中学校で28.3%となっており、中学校で最も実施割合が高く、高等学校で最も実施割合が低い結果となった。

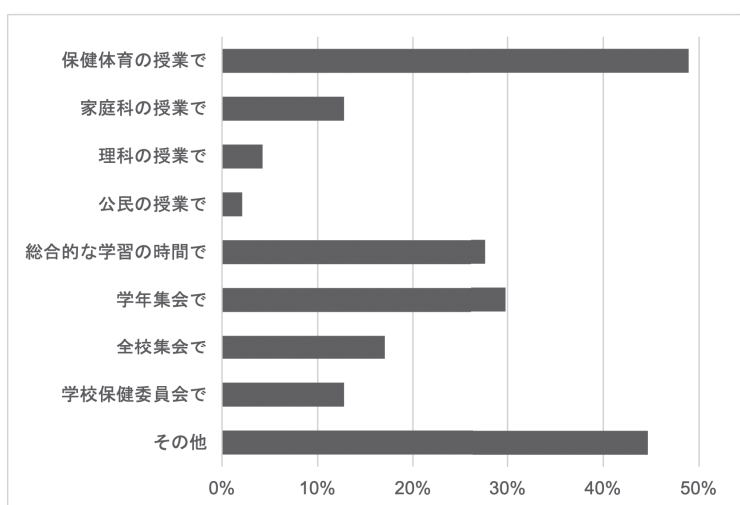
「生命の安全教育」の実施状況 (N=165)



2) 「生命の安全教育」の指導機会

現在所属している学校で文部科学省が教材を作成した「生命の安全教育」を実施していると回答した47人に対して、複数回答で指導機会を尋ねた。最も多いのが「保健体育の授業」で48.9%と半数近くを占めており、2番目に多いのが「学年集会」で29.8%、3番目に多いのが「総合的な学習の時間」で27.7%であった。以下多い順に「全校集会」17.0%、「家庭科の授業」と「学校保健委員会」が同率で12.8%、「理科の授業」4.3%、「公民の授業」2.1%であった。また、回答者の44.7%が「その他」として自由記述欄にこれらの選択肢以外の機会を挙げていた。主な回答として「特別活動」「学級活動」「道徳の授業」「朝の会」「発育測定するとき」「性教育の期間」「性教育講演会」「規範意識育成事業」「保健だよりや関連の冊子・チラシ等配布」などが見られた。

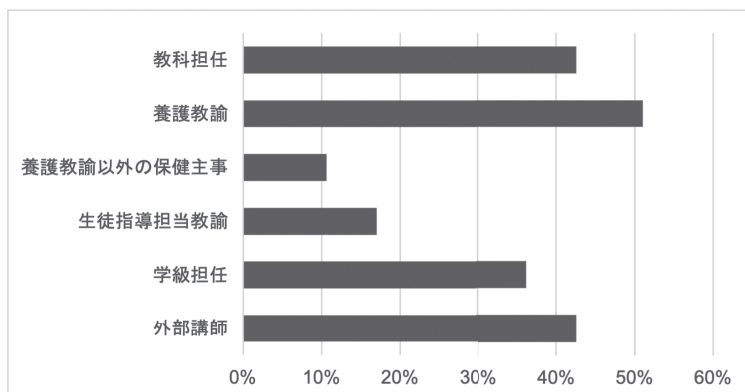
「生命の安全教育」の指導機会（複数回答 N=47）



3) 「生命の安全教育」の指導者

現在所属している学校で文部科学省が教材を作成した「生命の安全教育」を実施していると回答した47人に対して、複数回答で指導者について尋ねた。最も割合が高いのが「養護教諭」で51.1%と半数以上を占めており、2番目に多いのは「教科担任」と「外部講師」で同率42.6%であった。続いて多い順に「学級担任」36.2%、「生徒指導担当教諭」17.0%、「養護教諭以外の保健主事」10.6%であった。

「生命の安全教育」の指導者（複数回答 N=47）



4) 「生命の安全教育」を指導する（した）うえで困っている（困った）こと

現在所属している学校で文部科学省が教材を作成した「生命の安全教育」を実施していると回答した47人に対して、「生命の安全教育」を指導する（した）うえで困っている（困った）ことを自由記述方式で尋ねた。以下に、学校種別に回答をすべて記す。ただし、類似の回答は1つに集約して記述している。

<小学校>

- ・文科省の教材動画のBGMが、子どもたちからこわいと言われた。
- ・性に関する教育など既存の教育と重複しているため、差別化することが難しい。
- ・担任、管理職は生命の安全教育のことを知らないと思う。
- ・指導してもプライベートゾーンに関する問題はなくなるらない。
- ・外部講師の選定が難しい。
- ・被害児童への対応と配慮
- ・時数の確保
- ・指導教材
- ・なし

<中学校>

- ・教材は細かく用意して、実施するだけに準備されていますが、校内では全く意識されていません。
校内のリーダーとなる立場の方がどんな意識をお持ちかが大きな鍵かと。
- ・職員間の共通理解、温度差
- ・養護教諭主体で実施しているため、私が転勤などをしたら指導は引き継がれるかどうか分からない。
- ・生徒の理解度の差
- ・困っているというほどではないですが、学年やクラスの生徒に応じた内容に修正すること。
- ・性に関する指導として行ったが、性に関する指導でないのが、不思議だった。なぜ安全指導？
- ・内容は使いやすいが、男女の交際と男→女子の暴力が前提になっていること。口頭で説明をつければいいが、印象として女子が被害にあうものだと感じる。
- ・時間の確保
- ・外部講師による一斉指導なので、興味のある内容でじょうずに話してくださるが、個々の反応がわかりにくい。
- ・講師依頼に係る費用
- ・外部講師を呼ぶ予算が足りない。
- ・外部講師の選択
- ・講師招聘の手続き
- ・評価ができないので、このくらいでいいのかわからない。
- ・文科省からの動画が1つしかないので、3年間同じ内容の動画を見ることになってしまうこと。

- ・複雑な家庭が多いので、伝え方には気をつけています。
- ・必要な生徒に限って、授業に出ていない。(不登校)
- ・不審者への対応の一つとして指導しているが、性被害の踏み込んだ内容(教員等による加害にもノー
　　とって良い)等には触れにくい。
- ・特にありません。
- ・外部講師の予算化がされているので、困ったことはない。

<高等学校>

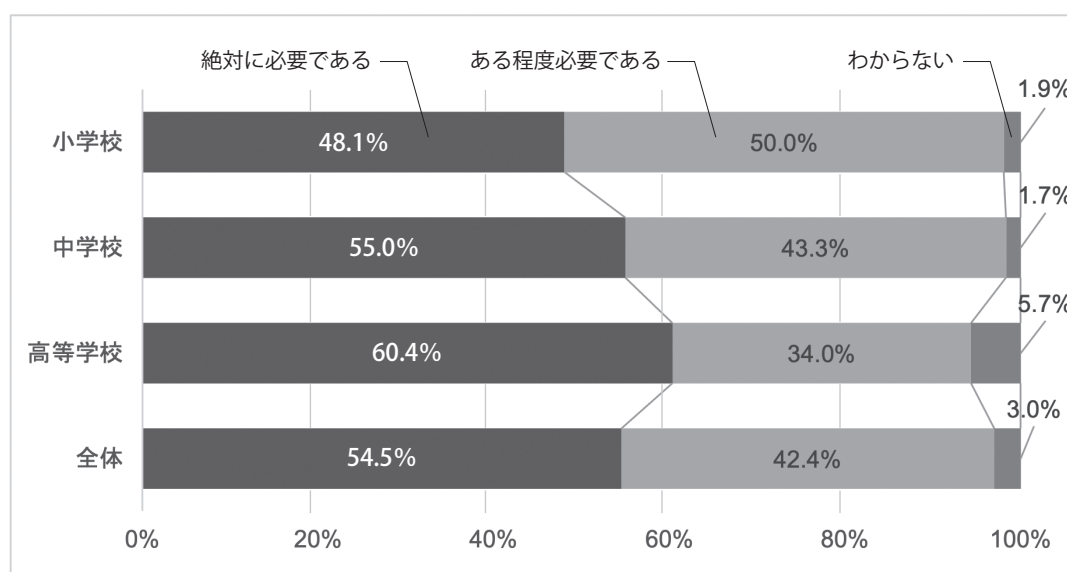
- ・1回の指導ではなく、継続の必要性を感じるが、内容や時間確保が課題。
- ・外部講師が少ないし、講演料が道教委の規定より高額なので、講演会の継続が難しい。
- ・虐待を受けたことがある生徒への配慮。
- ・生徒の中に性被害を受けた経験がある場合に、その生徒が傷つかないように最大限配慮しているが、
　　生徒の実情把握が難しいので適切に行えているか不安である。
- ・自傷行為にする生徒がいるクラスへの指導時の声かけの配慮。
- ・発達に個人差があるため、発達段階に応じた指導がむずかしい。中学生は比較的女子生徒のほうが
　　進んで学習に取り組んでくれるが、男子生徒は羞恥心もあり授業中にふざけたり気が散ってしまう
　　ことが多い。
- ・生徒の興味関心が低いこと。
- ・時間確保が難しい。
- ・教科担当の共通理解
- ・指導していないためわかりません。
- ・特にないです。

5) 「生命の安全教育」の必要性

「生命の安全教育」は必要だと思うか

「生命の安全教育」が必要だと思うかどうかについて、「絶対に必要である」「ある程度必要である」「あまり必要ない」「全く必要ない」の4件に「わからない」「その他」2件を加えた6件の選択肢で尋ねた。「あまり必要ない」または「全く必要ない」と答えた者はいなかった。全体では、「絶対に必要である」が54.5%、「ある程度必要である」が42.4%で、合わせて96.9%が必要であるとの認識を示した。学校種別では、「絶対に必要である」との回答割合は学校段階が上がるほど高くなっており、小学校48.1%、中学校55.0%、高等学校60.4%であった。

「生命の安全教育」は必要だと思うか (N=165)



「生命の安全教育」が必要だと思う理由

続いて、前の質問の回答について、そのように思う理由を自由記述方式で尋ねた。以下に、学校種別に、「絶対に」または「ある程度」必要だと答えた理由、「わからない」と答えた理由の順に、回答をすべて記す。ただし、類似の回答は1つに集約して記述している。

<小学校>

[必要である理由]

- ・子どもが被害者となる性暴力等の事件が増えているから。
- ・SNSでのトラブルから死亡事件にまで発展するようなニュースを度々目にするから。性的虐待は見づらいため。

- ・ゲームやメディアにどっぷり浸かって現実について麻痺した感覚を持っているから。
- ・低学年の児童間でズボン捲りなどのいじめがあり、生命の安全教育の必要性を感じた。
- ・生命の安全教育をする中で、児童生徒が、自分もまわりの人も大切にするための行動について考えることができ、また、学校という場で考えたことを実践することができると思うから。
- ・全ての教育に通ずるから。
- ・家庭では学べないことだから。
- ・義務教育期間に学ぶことに意味があると感じるから。
- ・他の人との関わり方を学んだり、高学年については SNS の使い方について改めて確認したりする場としているため。
- ・自殺の予防、正しい性に関する指導
- ・子どもたちが小さいときから正しい知識を身につけることが大切だと思うからです。
- ・性被害防止・性加害防止についての教材としては、担任が手軽に使えるから。
- ・生命は尊いものであるから。
- ・必要なことと思うが、時間の確保や指導する側の知識理解に不安がある。

【わからない】

- ・生命の安全教育について、自分自身が、まだきちんと理解できていないため。

<中学校>

【必要である理由】

- ・ SNS でのトラブルが多い。写真を投稿する、ネット上の人間とつながることへのハードルが低く、危機意識があまりない。
- ・人の気持ちを想像すること、自分の気持ちを言葉にすることの苦手な生徒が多いと感じている。
- ・年に 2 時間の外部講師の講話だが、終わった後に、生徒たちから相談が来る。
- ・性に関する情報がネット上に氾濫し、子どもたちが自由に見ることができる状況の中で、性教育は義務教育課程で絶対に必要なものであると思うが、時間数もとても少なく内容も不十分であると思う。
- ・自分の命を大切にすることを学校教育の中で教えていくべきだから。
- ・命を守るため、自分の心と体を守るために必要だから。
- ・家庭教育での基盤も含めて教育していくべき分野であり、学校教育だけで行うものではないと考えているため。
- ・変わりゆく社会の中で、自分自身を守る術を身につけることは大切だと思うから。一方で、学校の中では、それに関連付く指導を日々しているため、「生命の安全教育」と改めて時間を取って指導する必要があるのかはわからない。
- ・被害に遭わないための教育に傾いているように感じ、加害者にならない教育が必要。
- ・必要だとは思うが、何でも(SNS・がん教育その他)学校で教育指導することになるのが本当に大変。(時間を作ることも講師を探すことも、指導内容を考えることも等々。)

- ・個人差のある内容なので、集団指導が適しているか、時期の妥当性等は考えなければいけないが、正しい理解が必要な内容なため。

【わからない】

- ・命の安全教育について理解していないため。

<高等学校>

【必要である理由】

- ・最近性に関する事件や問題が多いので、学生のころから正しい知識や倫理観、相談先を知っておくべきだと思うから。
- ・SNS を巡るトラブルはじめ性被害は都会だけの問題ではないから。
- ・正しい知識を公教育で学ぶべきと考えます。
- ・自分のことは自分で守ること、相手のことを守ることの知識に繋がると思うから。普段の人間関係の構築にも役立つから。
- ・年齢に関係なく性暴力は起きる可能性があり、正しい知識や自他を大切にすることを身につける機会を設けて、対策やもし起きてしまった時の対応ができることが必要だと思うため。
- ・学力ももちろん大切だが、生きていく力も必要だから。
- ・望まない妊娠に何度も対応してきたため。
- ・必要なものではあるが、学校が主となるより小さな頃からの家庭での教育がまずは大切だと思う。
- ・きちんと正しいことが学べる場・機会があった方が良いと思うため。最近は SNS の発展等で正しいものも正しくないものも様々な情報が流れ、間違った認識になってしまうと困る。
- ・性暴力が起こっても、自分から言い出せない人も多いから。

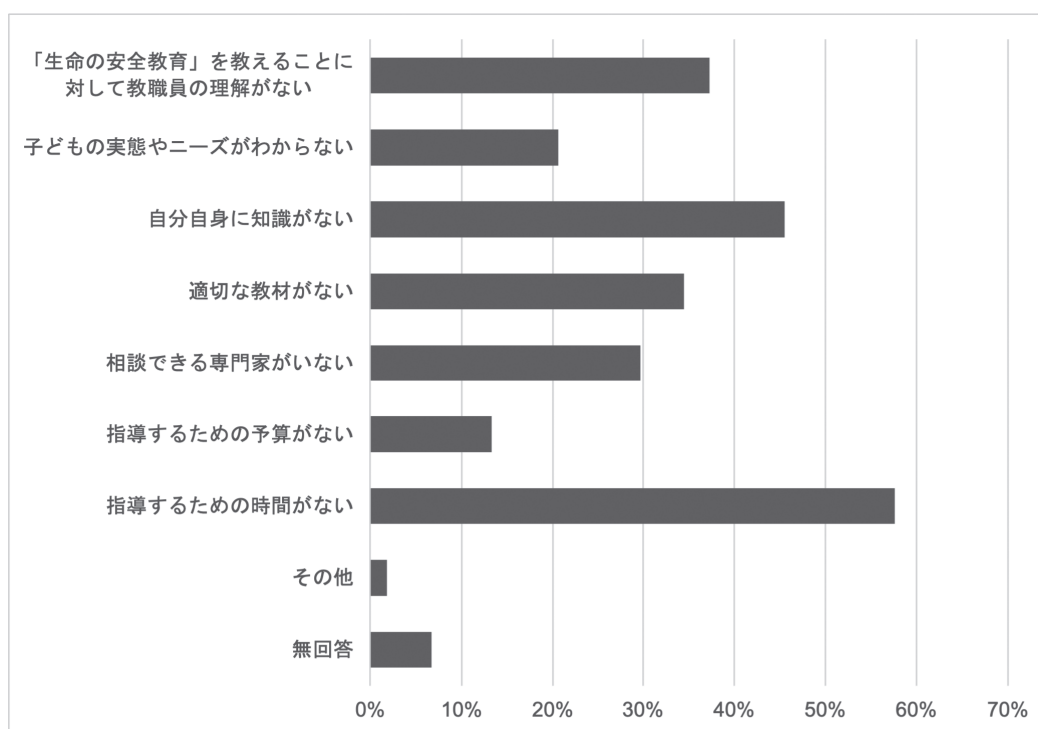
【わからない】

- ・名前が非常に分かりにくい。
- ・生命の安全教育をはじめて聞いたから。

6) 「生命の安全教育」実施上の課題

勤務校で自身が「生命の安全教育」を行うとしたらどのような課題があるかについて、複数回答方式で尋ねた。最も回答割合が高かったのが「指導するための時間がない」で、57.6%と半数以上が選択しており、2番目が「自分自身に知識がない」で45.5%、3番目が「生命の安全教育」を教えることに対して教職員の理解がない」で37.3%であった。以下、回答割合の高い順に、「適切な教材がない」34.5%、「相談できる専門家がない」29.7%、「子どもニーズや実態がわからない」20.6%、「指導するための予算がない」13.3%であった。「その他」とした回答が3件(1.8%)あり、「保護者の理解」「担任の力量によって指導内容に差が生まれる」「性暴力についてではなく、それ以前の自分の心を守ったり、アンガーマネジメントなどに時間をさいている」との回答が見られた。

自身が「生命の安全教育」を行う場合の課題（複数回答 N=165）



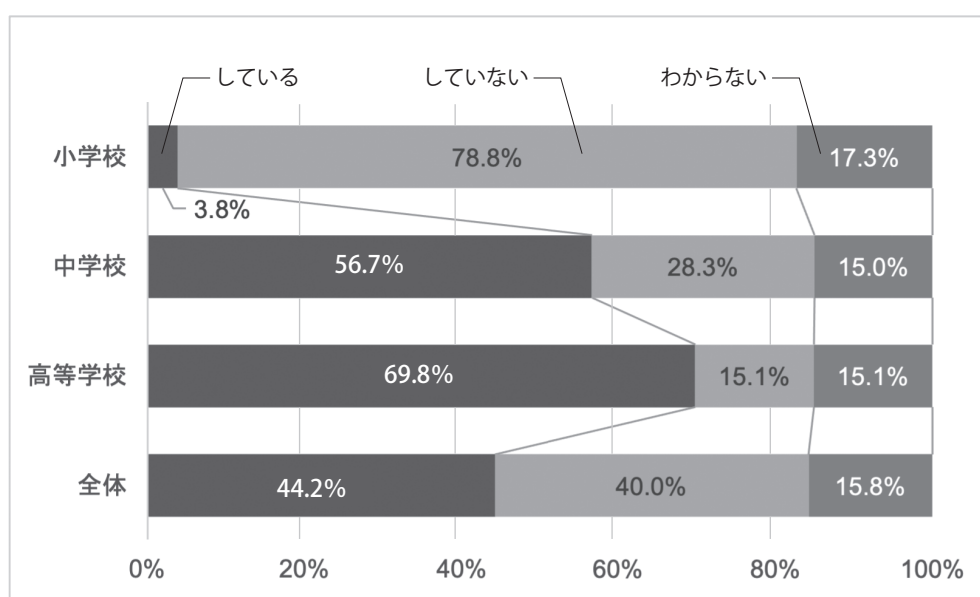
(3) デート DV 予防教育

1) デート DV についての指導状況

所属している学校でのデート DV についての指導状況を尋ねたところ、全体では「している」44.2%、「していない」40.0%、「わからない」15.8%であり、実施状況を把握できている回答者の間では、「している」との回答が「していない」をやや上回った。

学校種別にみると、高等学校では「している」が69.8%と全体の7割近くにのぼり、「中学校でも56.7%と半数以上が「している」と回答した。対照的に、小学校で「している」との回答はわずか3.8%であり、78.8%と8割近くが「していない」と回答した。

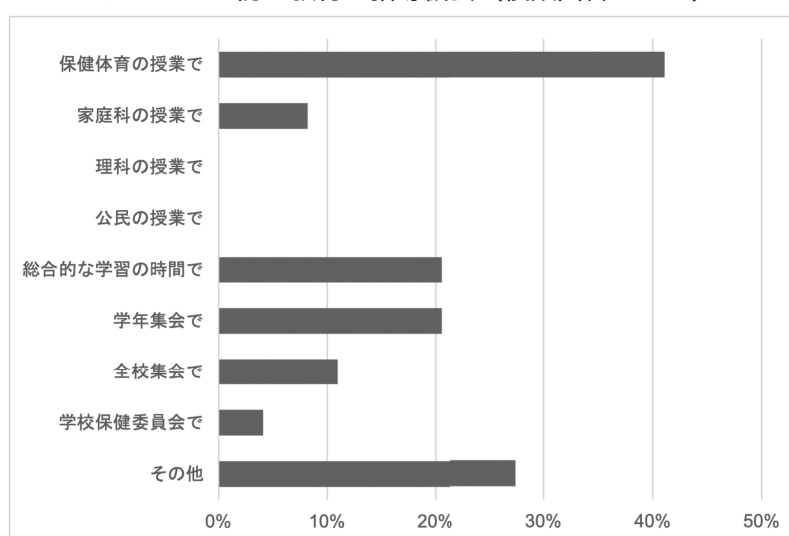
デート DV についての指導状況 (N=165)



2) デート DV 予防教育の指導機会

現在所属している学校でデート DV について指導していると回答した 73 人に対して、デート DV 予防教育の指導機会について複数回答で尋ねた。最も回答割合が高いのが「保健体育の授業」で 41.1% と 4 割以上を占めており、2 番目に高いのが「総合的な学習の時間」と「学年集会」でともに 20.5% であった。以下多い順に「全校集会」（11.0%）、「家庭科の授業」（8.2%）、「学校保健委員会」（4.1%）であった。「理科の授業」「公民の授業」の回答は 0 件だった。また、回答者の 27.4% が「その他」として自由記述欄にこれらの選択肢以外の機会を挙げていた。主な回答として「性教育講演会」「性教育の期間」「人権を学ぶ期間」「自治体主催の講話」「規範意識育成事業」「特別活動」「ロングホームルーム・学級活動」「生徒指導関係」「個別指導」「保健だよりや関連資料・チラシ等の配布、掲示」などが見られた。

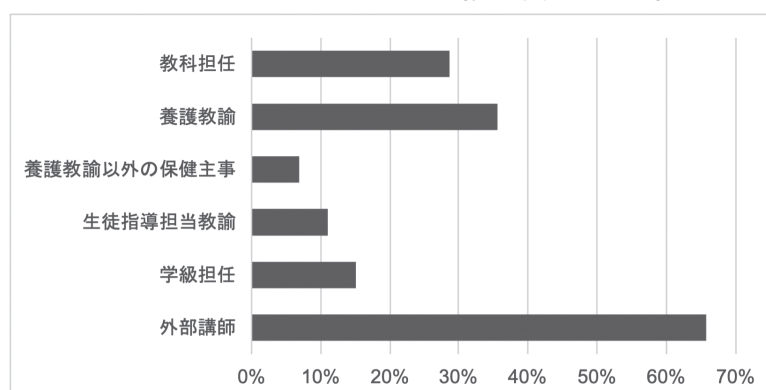
デート DV 防止教育の指導機会（複数回答 N=73）



3) デート DV 予防教育の指導者

現在所属している学校でデート DV について指導していると回答した 73 人に対して、デート DV 予防教育を誰が指導しているかを複数回答方式で尋ねた。最も割合が高いのが「外部講師」で 65.8% と全体の約 3 分の 2 を占めており、2 番目に割合が高いのが「養護教諭」で 35.6%、3 番目に割合が高いのが「教科担任」で 28.8% であった。以下、回答割合の高い順に「学級担任」15.1%、「生徒指導担当教諭」11.0%、「養護教諭以外の保健主事」6.8% であった。

デート DV 防止教育実施者（複数回答 N=73）



4) デート DV 予防教育の必要性

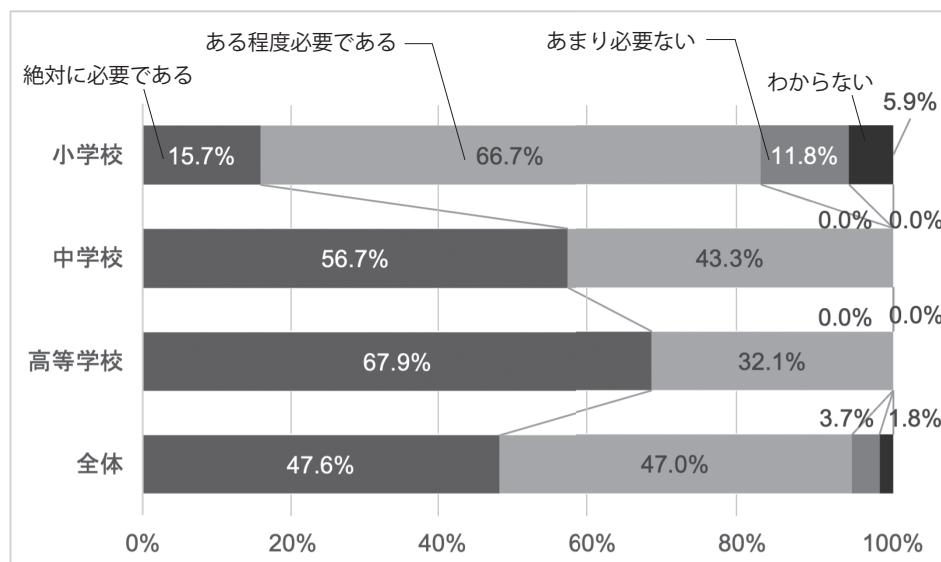
デート DV 予防教育の必要性

デート DV に関する指導は必要だと思うかどうかについて、「絶対に必要である」「ある程度必要である」「あまり必要ない」「全く必要ない」の 4 件に「わからない」「その他」2 件を加えた 6 件の選択肢で尋ねた。「全く必要ない」または「その他」と答えた者はいなかった。

全体では、「絶対に必要である」が 47.6%、「ある程度必要である」が 47.0% であり、それらを合わせると 94.6% が必要であるとの認識を示した。

学校種別では、「絶対に必要である」との回答割合は学校段階が上がるほど高くなっており、小学校 15.7%、中学校 56.7%、高等学校 67.9% であった。「あまり必要ない」との回答は小学校のみで 11.8% 見られた。

デート DV に関する指導は必要だと思うか (N=165)



デート DV に関する指導が必要な理由

続いて、前の質問の回答について、そのように思う理由を自由記述方式で尋ねた。以下に、学校種別に、「絶対に」または「ある程度」必要だと答えた理由（小学校では「あまり必要ない」「わからない」と答えた理由も）について、回答をほぼそのままの形で記す。ただし、類似の回答は1つに集約して記述している。

<小学校>

[必要である理由]

- ・以前、中学校に勤務している際に、外部講師を依頼し授業を行っていただいたことがあり、生徒・教職員に「まずは、知ることの大切さ等」の変容が見られた。
- ・人権に関することだから。
- ・誰にでも起こりうる可能性があるから。加害者、被害者のどちらにもなってほしくないから。
- ・今の子どもたちの様子から、デート DV に関する指導をしてもピンと来ない可能性があるが、知識だけは持ってほしいため、ある程度必要だと思う。
- ・バウンダリーの話、同意の話が必要だと思う。またそこからデート DV の教育につながると思うから。
- ・何が DV に当たるのか知っておかないと、被害があったときに助けを求められない、知らずに加害者になってしまうということが起こってしまうから。
- ・小学生は高学年になっても心の成長の個人差が大きく、一律に指導が必要か考えると迷うところである。
- ・小学生に対してどこまで指導すれば良いかわからない。

[あまり必要ない]

- ・教育課程の限られた時間の中で、性教育の時間がそれほどない。その中で、デート DV に焦点を当てることは、優先順位としては低いと考えられる。

[わからない]

- ・小学校勤務なので、個別指導は必要だと思うが、全体指導は子どもの実態に応じて実施したらよいと思う。
- ・小学生に必要なかどうかかわからない。
- ・DV の加害被害にならないために必要なコミュニケーションはあると思うがデートのみに焦点を当てるのは学校教育の中ではどうなのかと思う。

<中学校>

[必要である理由]

- ・恋愛においてだけでなく、人付き合いが苦手な生徒が増えているように感じるため、本人にその気がなくてもデート DV になっているのではないかと思う。付き合うという概念が固まっていない

学生のうちに、正しいお付き合い・人付き合いの仕方を学んだほうが、将来トラブルに巻き込まれることが少なくなると思う。また SNS などでも偏った恋愛観などに触れる機会も多いと思うので、本来はどういう心構えや付き合い方が正常なのかをしっかりと知識として伝える必要があると感じる。正直、今大人のひとと、現代の社会でも境界線が違うとも感じるため、社会にあった知識を伝える必要があると考えます。

- ・今の子どもたちは SNS で簡単に知らない人とつながれる環境にあり、素性がわからないままに相手と付き合うことができる。誰にも相談できないままに、DV などを受けてしまうことが考えられる。その時に「デート DV」の知識があれば、自分自身でもおかしいことだと気付くことができると思うから。
- ・ほぼすべての生徒が高校へ進学するが、早期に退学する生徒も少なくないと聞いているので、義務教育のうちに行っておく必要性があると思います。
- ・好きな人のいうことだから自分は我慢すべきだ。とか、パートナーの望むことだからそうする。とか、自分の気持ちを大事にできていない場面がたくさんあると思うので、デート DV について学んで「同意」や「尊重」について考える時間は必須。
- ・男性が被害者になることもあるが、生物学的なことや日本の風習的に女性が被害者になることが多いため、自然に男女差が出てしまうため、その差を少しでも埋めることで互いを尊重しやすくなるため。
- ・子どもの関心の高い恋愛を通して、性暴力被害などを教えられるし、男女交際についても関連して教えられるから。
- ・望まない妊娠、人工妊娠中絶、女性の身体へのダメージを男女共に知る必要がある。男性は身ごもらせる責任、女性は身ごもる自覚をもつ必要がある。
- ・暴力だけでなく、相手からきちんとした同意を得られない場合も罪になることを知らなそうだから。
- ・生徒がこれからいろいろな人と話していく上で、必要になりやすい内容だから。
- ・ジェンダー平等を伝える行き先に、対等な関係性を学ばないといけないと感じた。
- ・本校では僻地ということもあり、生徒たちは限られた狭い地域で生活をしています。しかし、スマートフォンの使用やこの先進学した時に自分で判断して行動できる力をつけて欲しいので必要だと考えました。

<高等学校>

[必要である理由]

- ・デート DV についての講習をした後のアンケートで、こんなこともデート DV になると思わなかった、知らず知らずのうちにデート DV をしないように気をつけてなければならなかったなどの感想があり、デート DV という言葉は知っていても、内容まで深く知らない子が多いのかという気づきがあったから。
- ・高校生だと自分の行為（された行為）が DV だという認識がない。
- ・生徒にとって身近なものであり、現在または将来的に関わる可能性があるため。また、デート DV

の知識がないために被害にあっても気がつかない場合もあるため。

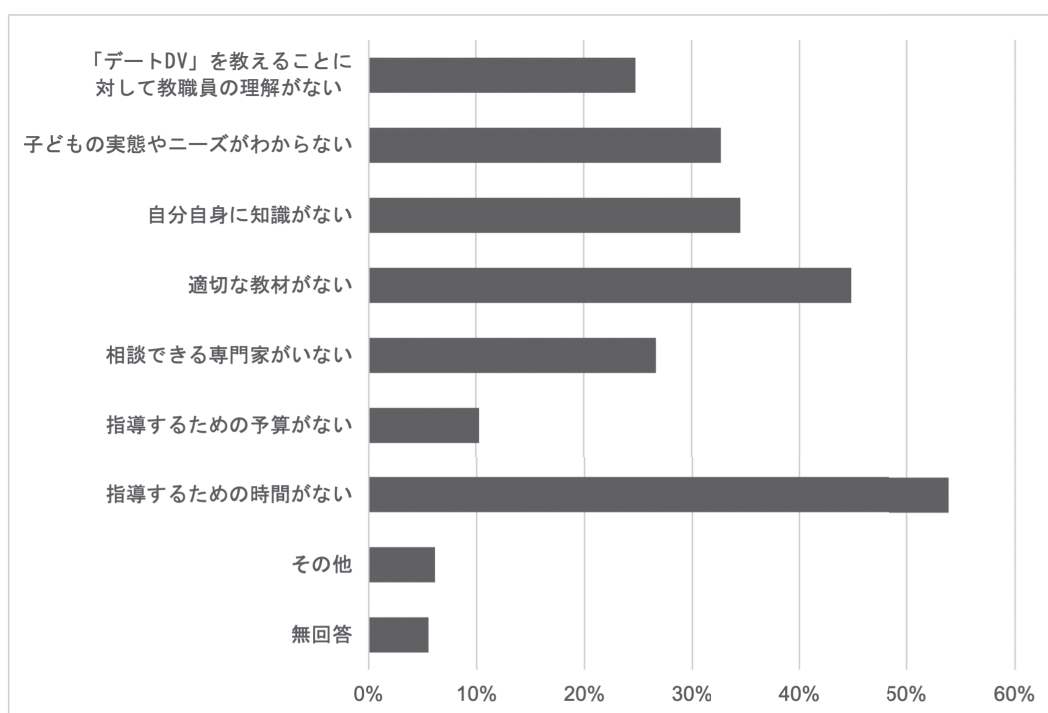
- ・当事者本人がデート DV を受けていることに気づかないがゆえに、事態が悪化したり、特に被害者側が精神的に病むケースが増えていると感じるため。
- ・公教育で扱うことにより、相談してもいいこと、相談すべきこととして、記憶される。
- ・中学校でも学んでいるがほとんどの生徒の頭に残っていないため繰り返しの指導が必要。
- ・若い年代でもデート DV が起こるので、学生の時に正しい知識等を身につけておくべきだと思うから。
- ・知識があることにより現実には起きていて自分自身を守ってほしいから。
- ・デート DV についての知識を習得し、良好な人間関係を築けるように学ぶ機会が必要と思います。
- ・デート DV は性暴力の一部だと思うので、性暴力は身近にあり、被害相談をよく受ける。加害者、被害者ともにその意識がないことも多々あり、教育の必要性を感じる。
- ・人との付き合い方を学ぶ必要あり。
- ・専門家の話を聞いた方がよい。

5) デート DV 指導上の課題

勤務校で自身がデート DV の指導を行うとしたらどのような課題があるかについて、複数回答方式で尋ねた。最も回答割合が高かったのが「指導するための時間がない」で、53.9%と半数以上が選択しており、2番目が「適切な教材がない」で44.8%、3番目が「自分自身に知識がない」で34.5%であった。以下、回答割合の高い順に「子どもニーズや実態がわからない」32.7%、「相談できる専門家がない」26.7%、「デート DV」を教えることに対して教職員の理解がない」24.8%、「指導するための予算がない」10.3%であった。これら以外に「その他」6.1%として、以下のような記述が見られた。

- ・ 継続指導や個別指導の必要性への対処。
- ・ 生徒にあった指導をするための授業準備の時間がない。
- ・ 自分だけでなく、チームとして指導内容を検討して実施したほうが良いと思うので、その調整が必要。
- ・ 指導のタイミング（時期）がわからない。
- ・ 実態などを教えても、生徒の理解が追いつかないのではないかと感じる。
- ・ 子どもの成長段階では、まだ必要ないと思われるから。特に、小学生。
- ・ 小学生には、必要ないかと思う。
- ・ 小学校ではプライベートゾーンや同意、バウンダリーなど基本的なことを先に教えるべきだと思う。
- ・ 対象者が、小学生の場合悩む。実際に体験者がいれば個別指導はできると思う。
- ・ 行為についても話をすることが必要だと思いますが、今の学習指導要領では積極的に勧めていない。抽象的な言葉で遠回しに伝えることで理解できなかったり、誤解してしまう可能性はあると思う。

自身がデート DV の指導を行う場合の課題（複数回答 N=165）



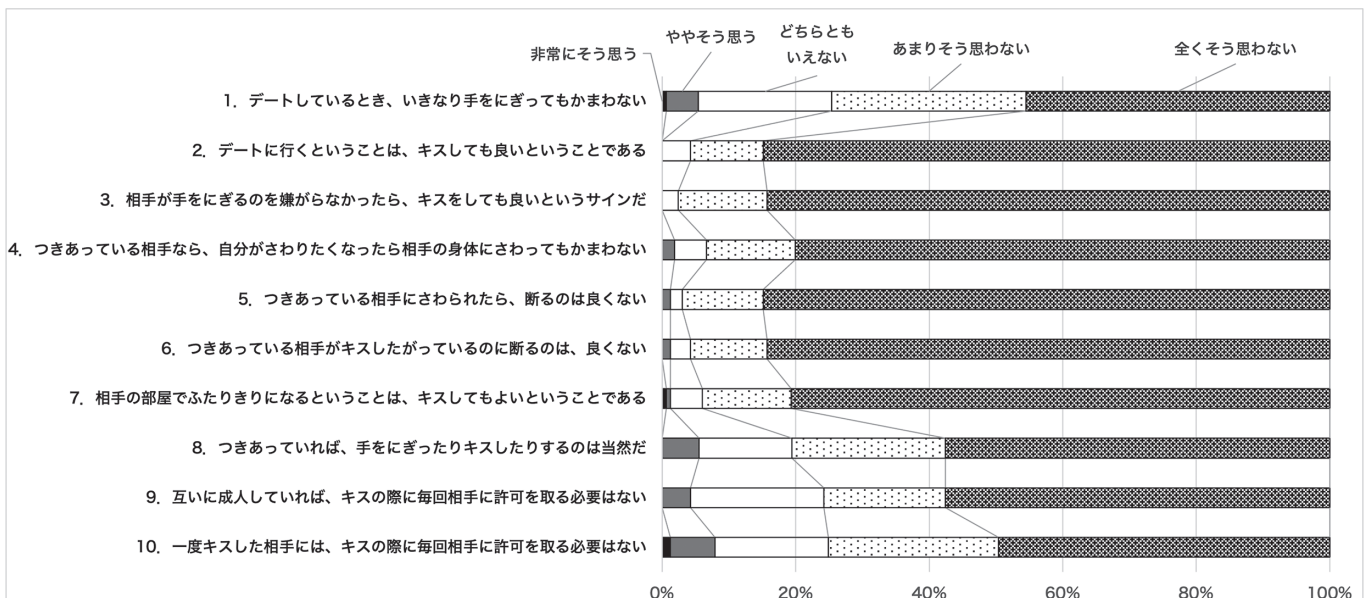
(4) 性的同意の認識

性的同意に関する10項目について、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階で尋ねた。

「あまりそう思わない」「全くそう思わない」を合わせた同意が必要とする回答割合は、次の6つの項目で90%を上回った。「2. デートに行くということは、キスしても良いということである」95.7%、「3. 相手が手をにぎるのを嫌がらなかったら、キスしても良いというサインだ」97.5%、「4. つきあっている相手なら、自分がさわりたくなったら相手の身体にさわってもかまわない」93.3%、「5. つきあっている相手にさわられたら、断るのは良くない」96.9%、「6. つきあっている相手がキスしたがっているのに断るのは、良くない」95.7%、「7. 相手の部屋でふたりきりになるということは、キスしてもよいということである」93.9%である。「8. つきあっていれば、手をにぎったりキスしたりするのは当然だ」では、同意が必要とする回答は80.6%と8割程度であった。「1. デートしているとき、いきなり手をにぎってもかまわない」75.2%、「9. 互いに成人していれば、キスの際に毎回相手に許可を取る必要はない」75.8%、「10. 一度キスした相手には、キスの際に毎回相手に許可を取る必要はない」74.6%の3項目では、同意が必要とする回答はほぼ4人に3人にとどまった。

「非常にそう思う」と「ややそう思う」を合わせた、同意を不要とする回答割合が10%を超える項目はなかったが、「1. デートをするとき、いきなり手をにぎってもかまわない」5.4%、「8. つきあっていれば、手をにぎったり、キスしたりするのは当然だ」5.5%、「10. 一度キスした相手には、キスの際に毎回相手に許可をとる必要はない」7.9%の3項目については、同意を不要とする回答が5%を上回った。

性的同意に関する考え (N=165)



(5) デート DV の認識

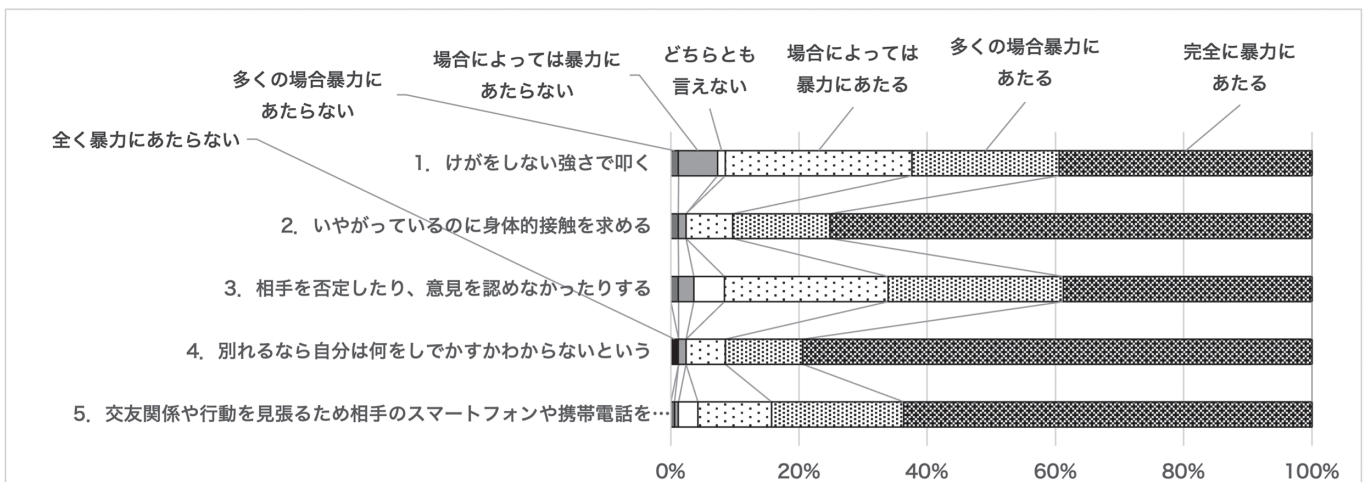
デート DV の認識に関しては、「(完全に/多くの場合/場合によっては) 暴力にあたる」とする者が、5つの行為項目すべてにおいて90%以上を占めていた。

ただし、それらの行為を暴力と見なす程度については、項目によって違いが見られた。「4. 別れるなら自分は何をしでかすかわからないという」では79.4%とほぼ8割が「完全に」暴力にあると答え、それに「多くの場合」を加えると91.5%であった。「2. いやがっているのに身体的接触を求める」でも、75.2%とほぼ4人に3人が「完全に」暴力にあると答え、それに「多くの場合」を加えると90.4%であった。

それらとは対照的に、「1. けがをしない強さで叩く」で「完全に」暴力にあるとの回答は39.4%と4割未満であり、「多くの場合」を加えても62.4%と全体の3分の2にもとどかなかった。「3. 相手を否定したり、意見を認めなかったりする」でも「完全に」暴力にあるとの回答は38.8%と4割にとどかず、「多くの場合」を加えても66.1%と全体の3分の2程度だった。

「5. 交友関係や行動を見張るため相手のスマートフォンや携帯電話をチェックする」では、「完全に」暴力にあるとする回答が63.6%であり、「多くの場合」を加えると84.2%であった。

デート DV の認識 (N=165)



2. 中高生調査の結果

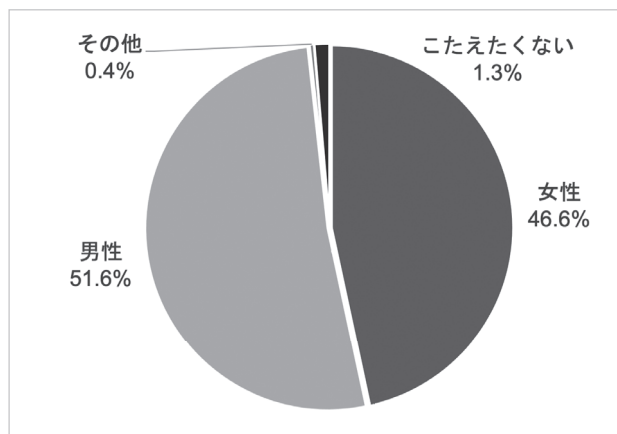
本調査では、回収した調査票において、「協力する」と答え、なおかつ「性別」「交際経験の有無」のすべてに回答したものを有効回答とした。有効回答は、全体で965人であった。

(1) 回答者の属性

1) 回答者の性別

有効回答のうち、「女性」は450人(46.6%)、「男性」は498人(51.6%)、「その他」は4人(0.4%)、「こたえたくない」は13人(1.3%)であった。

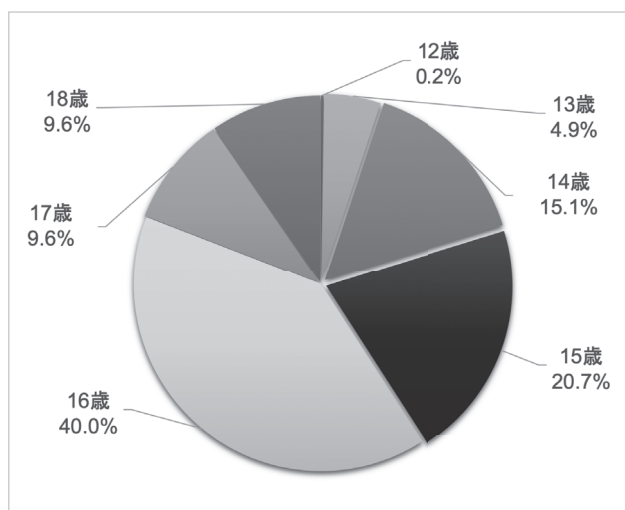
回答者の性別 (N=965)



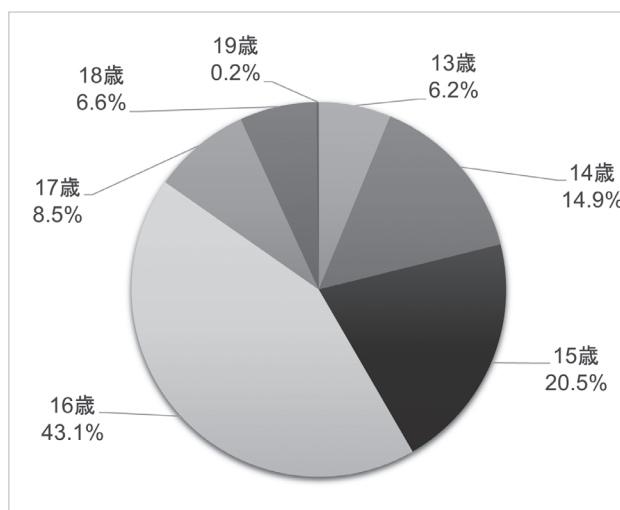
2) 年齢別の割合

女性は、12歳が1人(0.2%)、13歳が22人(4.9%)、14歳が68人(15.1%)、15歳が93人(20.7%)、16歳が180人(40.0%)、17歳が43人(9.6%)、18歳が43人(9.6%)であった。男性は、13歳が31人(6.2%)、14歳が74人(14.9%)、15歳が102人(20.5%)、16歳が214人(43.1%)、17歳が42人(8.5%)、18歳が33人(6.6%)、19歳が1人(0.2%)であった。性別をその他と答えた人は、14歳が3人(75.0%)、18歳が1人(25.0%)だった。また、性別を「こたえたくない」と回答した人は、13歳が1人(7.7%)、15歳が2人(15.4%)、16歳が4人(30.8%)、17歳が2人(15.4%)、18歳が4人(30.8%)であった。なお、男性1人が年齢を回答しなかったため、年齢内訳は男性の合計人数より少ない。

女性の年齢構成 (N=450)



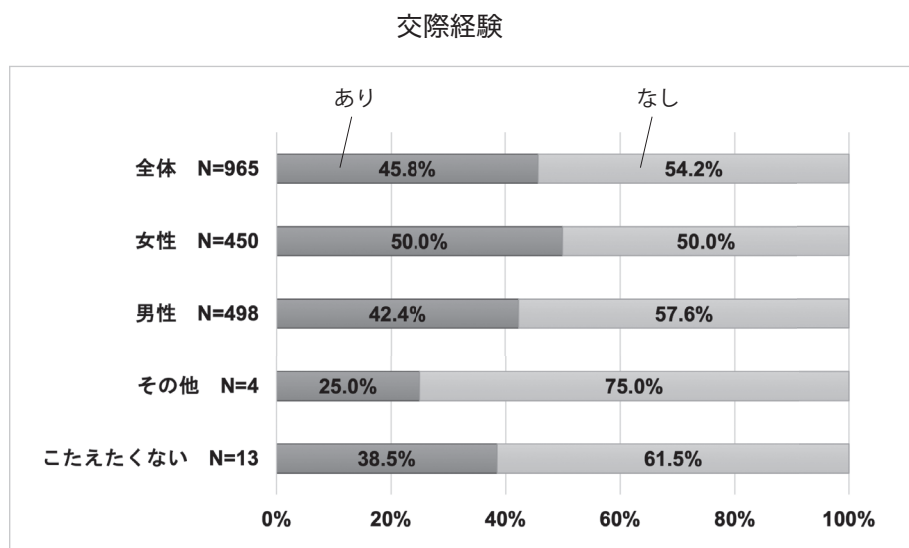
男性の年齢構成 (N=497)



(2) 交際経験の割合

1) 交際経験の割合

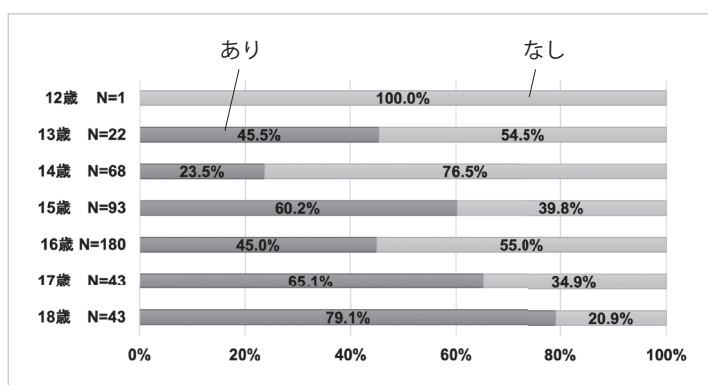
有効回答 965 人のうち、交際経験があると答えたのは 442 人 (45.8%) だった。女性 450 人のうちでは 225 人 (50.0%)、男性 498 人のうちでは 211 人 (42.4%) であった。性別をその他と答えた人は 4 人中 1 人 (25.0%) で、性別を「こたえたくない」と回答した人は 13 人中 5 人 (38.5%) であった。



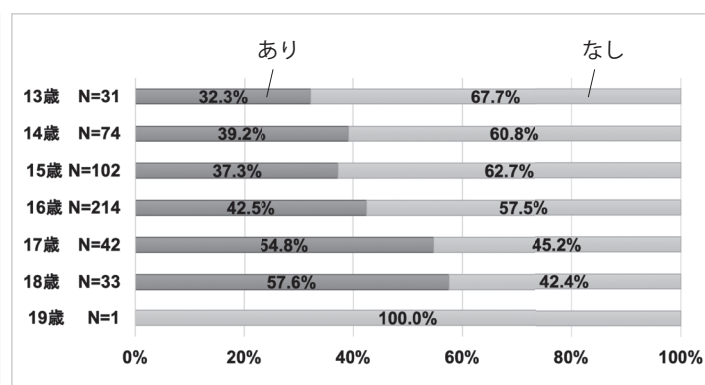
2) 男女における年齢別の交際経験の割合

女性、男性それぞれの年齢別の交際経験の割合は以下ようになった。なお、男性 1 人が年齢を回答しなかったため、年齢内訳は男性の合計人数より少ない。

交際経験 (女性)



交際経験 (男性)



(3) デート DV の実態

デート DV で起きる暴力を 5 つの種類（行動の制限、精神的暴力、経済的暴力、身体的暴力、性的暴力）ごとに 6 項目、合計 30 項目を挙げた。

行動の制限	他の異性と話しをしないと約束する
	返信が遅いと怒る
	一日の自分の行動をすべて報告させる
	友人関係を制限する
	スマホや携帯のデータを消す
	服装や髪形を決めつける
精神的暴力	バカ、死ねなど傷つく言葉を使う
	体型や容姿について嫌なことを言う
	お前のせいだと言う
	別れたら死ぬと言う
	理由も言わずに無視をする
	大切にしているものをこわしたり、捨てる
経済的暴力	デートの費用をいつも払わせる
	貸したお金を返さない
	無理やりお金を出させる
	高いプレゼントを買ってほしいと言う
	バイトを辞めさせる、あるいはさせない
	別れるならこれまでのデート代を返せと言う
身体的暴力	つねったり、噛んだりする
	壁に押しつける
	殴る
	蹴る
	首を絞める
	突き飛ばしたり、引きずる
性的暴力	嫌がっているのに体を触る
	嫌がっているのにキスをする
	嫌がっているのにセックスをする
	避妊に協力しない
	裸や性行為の写真や動画を撮る
	裸や性行為の写真や動画を撮りたい、あるいは送って欲しいと要求する

1) 被害経験および加害経験について

交際経験があると回答した人に、先の30項目について「あなたは、これまでに交際相手(つきあった人)からされたり、したことがありますか?」と尋ねたところ、1つでも被害経験がある人は、全体(N=436)で40.6%、女性(N=225)では45.8%、男性(N=211)では35.1%であった。一方、1つでも加害経験があると回答した人は全体では26.6%で、女性では27.1%で、男性では加害が26.1%であった。各年齢別の被害・加害経験の数の割合を以下の表に示した。なお、男性1人が年齢を回答しなかったため、年齢内訳は男性の合計人数より少ない。

被害経験

交際経験のある人		1つでも被害	1つのみ	2個以上 5個未満	5個以上 10個未満	10個以上 20個未満	20個以上	
全体	N=436	40.6%	14.4%	14.9%	8.6%	2.4%	0.2%	
女性	N=225	45.8%	18.7%	13.7%	10.3%	2.9%	0.0%	
男性	N=211	35.1%	10.0%	16.1%	6.7%	2.0%	0.5%	
女性	13~15歳	N=82	57.3%	28.0%	13.4%	12.1%	3.6%	0.0%
	16歳	N=81	33.3%	11.1%	13.5%	8.6%	0.0%	0.0%
	17歳	N=28	53.6%	25.0%	25.0%	3.6%	0.0%	0.0%
	18歳	N=34	41.2%	8.8%	5.9%	14.7%	11.6%	0.0%
男性	13~15歳	N=77	27.3%	7.8%	10.4%	6.5%	2.6%	0.0%
	16歳	N=91	38.5%	9.9%	22.0%	5.5%	0.0%	1.1%
	17歳	N=23	34.8%	13.0%	8.6%	12.9%	0.0%	0.0%
	18歳	N=19	52.6%	15.8%	21.1%	5.3%	10.6%	0.0%

加害経験

交際経験のある人		1つでも加害	1つのみ	2個以上 5個未満	5個以上 10個未満	10個以上 20個未満	20個以上	
全体	N=436	26.6%	11.2%	11.2%	3.2%	0.6%	0.2%	
女性	N=225	27.1%	8.4%	14.6%	2.6%	0.8%	0.4%	
男性	N=211	26.1%	14.2%	7.5%	3.8%	0.5%	0.0%	
女性	13~15歳	N=82	32.9%	12.2%	17.1%	1.2%	2.4%	0.0%
	16歳	N=81	13.6%	3.7%	8.6%	1.2%	0.0%	0.0%
	17歳	N=28	32.1%	3.6%	28.5%	0.0%	0.0%	0.0%
	18歳	N=34	41.2%	14.7%	11.7%	11.7%	0.0%	2.9%
男性	13~15歳	N=77	22.1%	15.6%	2.6%	3.9%	0.0%	0.0%
	16歳	N=91	26.4%	11.0%	12.1%	3.3%	0.0%	0.0%
	17歳	N=23	30.4%	21.7%	0.0%	4.3%	4.3%	0.0%
	18歳	N=19	36.8%	15.8%	15.9%	5.3%	0.0%	0.0%

2) 暴力の種類別にみた被害・加害経験

①行動の制限

6種類の項目の中で、女性全体では被害経験・加害経験ともに「1. 他の異性と話をしないと約束する」が最も多く、被害が22.7%、加害が11.6%であった。一方、男性では被害経験は「1. 他の異性と話をしないと約束する」と「2. 返事が遅いと怒る」がされたことが多く17.5%で、加害経験は「1. 他の異性と話をしないと約束する」が最も多く6.6%であった。

行動の制限

交際経験のある人		1. 他の異性と話をしないと約束する	2. 返事が遅いと怒る（おこる）	3. 一日の自分の行動をすべて報告させる	4. 友人関係を制限する	5. スマホや携帯のデータを消す	6. 服装や髪型を決めつける	
女性 N=225	被害	22.7%	20.0%	8.0%	14.7%	3.1%	3.6%	
	加害	11.6%	11.1%	6.7%	7.1%	2.7%	1.8%	
男性 N=211	被害	17.5%	17.5%	7.6%	12.8%	2.4%	2.4%	
	加害	6.6%	6.2%	4.3%	6.2%	2.4%	1.9%	
女性	13～15歳 (N=82)	被害	29.3%	23.2%	9.8%	14.6%	1.2%	4.9%
		加害	14.6%	13.4%	8.5%	11.0%	2.4%	3.7%
	16歳 (N=81)	被害	9.9%	13.6%	3.7%	14.8%	2.5%	1.2%
		加害	4.9%	7.4%	1.2%	3.7%	2.5%	0.0%
	17歳 (N=28)	被害	35.7%	14.3%	3.6%	7.1%	3.6%	3.6%
		加害	17.9%	10.7%	3.6%	0.0%	0.0%	0.0%
	18歳 (N=34)	被害	26.5%	32.4%	17.6%	20.6%	8.8%	5.9%
		加害	14.7%	14.7%	17.6%	11.8%	5.9%	2.9%
男性	13～15歳 (N=77)	被害	11.7%	14.3%	9.1%	9.1%	1.3%	3.9%
		加害	2.6%	2.6%	2.6%	5.2%	2.6%	2.6%
	16歳 (N=91)	被害	16.5%	19.8%	3.3%	11.0%	3.3%	2.2%
		加害	8.8%	7.7%	4.4%	5.5%	2.2%	1.1%
	17歳 (N=23)	被害	26.1%	21.7%	8.7%	21.7%	0.0%	0.0%
		加害	13.0%	13.0%	0.0%	8.7%	4.3%	0.0%
	18歳 (N=19)	被害	36.8%	26.3%	21.1%	26.3%	5.3%	0.0%
		加害	5.3%	5.3%	15.8%	10.5%	0.0%	5.3%

なお、男性1人が年齢を回答しなかったため、年齢内訳は男性の合計人数より少ない。

②精神的暴力

6種類の項目の中で、女性全体では被害経験・加害経験ともに「11.理由も言わずに無視をする」が最も多く、被害が11.6%、加害が7.6%であった。一方、男性においても被害経験は「11.理由も言わずに無視をする」が最もされたことが多く11.8%で、加害経験は「11.理由も言わずに無視をする」と「7.バカ、死ねなどの傷つく言葉を言う」が最も多く5.2%であった。

精神的暴力

交際経験のある人		7.バカ、死ねなど傷つく言葉を言う	8.体型や容姿(ようし)について嫌なことを言う	9.別れたら死ぬと言う	10.お前のせいだと言う	11.理由も言わずに無視をする	12.大切にしているものをこわしたり、捨てる	
女性 N=225	被害	8.0%	6.2%	8.0%	8.4%	11.6%	0.9%	
	加害	6.2%	2.2%	2.7%	3.6%	7.6%	0.4%	
男性 N=211	被害	8.1%	3.8%	6.6%	6.6%	11.8%	1.4%	
	加害	5.2%	2.4%	2.8%	1.4%	5.2%	0.5%	
女性	13~15歳 (N=82)	被害	9.8%	7.3%	12.2%	12.2%	13.4%	2.4%
		加害	6.1%	3.7%	3.7%	4.9%	6.1%	0.0%
	16歳 (N=81)	被害	3.7%	3.7%	4.9%	1.2%	9.9%	0.0%
		加害	3.7%	0.0%	0.0%	0.0%	6.2%	0.0%
	17歳 (N=28)	被害	10.7%	10.7%	0.0%	10.7%	10.7%	0.0%
		加害	3.6%	0.0%	3.6%	7.1%	10.7%	0.0%
	18歳 (N=34)	被害	11.8%	5.9%	11.8%	14.7%	11.8%	0.0%
		加害	14.7%	5.9%	5.9%	5.9%	11.8%	2.9%
男性	13~15歳 (N=77)	被害	9.1%	6.5%	5.2%	6.5%	9.1%	1.3%
		加害	5.2%	1.3%	2.6%	1.3%	2.6%	0.0%
	16歳 (N=91)	被害	5.5%	2.2%	7.7%	6.6%	13.2%	1.1%
		加害	4.4%	2.2%	2.2%	1.1%	6.6%	1.1%
	17歳 (N=23)	被害	8.7%	0.0%	4.3%	8.7%	13.0%	0.0%
		加害	4.3%	4.3%	8.7%	4.3%	13.0%	0.0%
	18歳 (N=19)	被害	15.8%	5.3%	10.5%	5.3%	15.8%	5.3%
		加害	10.5%	5.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

なお、男性1人が年齢を回答しなかったため、年齢内訳は男性の合計人数より少ない。

③経済的暴力

6種類の項目の中で、女性全体の被害経験では「14. かしたお金を返さない」が最もされたことが多く1.3%であった。加害経験は「16. 高いプレゼントを買ってほしいと言う」が1.3%で最も多かった。一方、男性においても被害経験は「14. かしたお金を返さない」が最もされたことが多く2.8%で、加害経験は「13. デートの費用を払わせる」と「14. かしたお金を返さない」が同率で0.5%であった。

経済的暴力

交際経験のある人		13. デートの費用をいつも払わせる	14. かしたお金を返さない	15. 無理やりお金を出させる	16. 高いプレゼントを買ってほしいと言う	17. バイトをやめさせる、あるいはさない	18. 別れるならこれまでのデート代を返せと言う	
女性 N=225	被害	0.0%	1.3%	0.4%	0.4%	0.4%	0.9%	
	加害	0.9%	0.9%	0.9%	1.3%	0.4%	0.4%	
男性 N=211	被害	2.4%	2.8%	1.9%	2.4%	0.5%	0.9%	
	加害	0.5%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
女性	13~15歳 (N=82)	被害	0.0%	2.4%	1.2%	0.0%	1.2%	1.2%
		加害	1.2%	1.2%	1.2%	1.2%	0.0%	0.0%
	16歳 (N=81)	被害	0.0%	1.2%	0.0%	1.2%	0.0%	0.0%
		加害	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	17歳 (N=28)	被害	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		加害	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	18歳 (N=34)	被害	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.9%
		加害	2.9%	2.9%	2.9%	5.9%	2.9%	2.9%
男性	13~15歳 (N=77)	被害	0.0%	3.9%	2.6%	2.6%	0.0%	0.0%
		加害	1.3%	1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	16歳 (N=91)	被害	4.4%	1.1%	2.2%	2.2%	0.0%	1.1%
		加害	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	17歳 (N=23)	被害	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		加害	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	18歳 (N=19)	被害	5.3%	10.5%	0.0%	5.3%	5.3%	5.3%
		加害	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

なお、男性1人が年齢を回答しなかったため、年齢内訳は男性の合計人数より少ない。

④身体的暴力

6種類の項目の中で、女性全体では被害経験・加害経験ともに「19. つねったり、かんだりする」が最も多く、被害が6.7%、加害が5.8%であった。一方、男性においても被害経験・加害経験ともに「19. つねったり、かんだりする」が最も多く、被害が7.6%、加害が4.3%であった。

身体的暴力

交際経験のある人		19. つねったり、かんだりする	20. 壁に押しつける	21. 殴る (なぐる)	22. 蹴る(ける)	23. 首を絞める(しめる)	24. 突き飛ばしたり、引きずる	
女性 N=225	被害	6.7%	2.2%	2.2%	1.8%	4.0%	2.7%	
	加害	5.8%	0.9%	1.3%	1.3%	2.2%	0.4%	
男性 N=211	被害	7.6%	2.4%	2.4%	1.9%	1.4%	1.9%	
	加害	4.3%	1.9%	1.4%	0.9%	1.4%	0.9%	
女性	13~15歳 (N=82)	被害	8.5%	2.4%	2.4%	1.2%	6.1%	2.4%
		加害	6.1%	0.0%	1.2%	1.2%	3.7%	0.0%
	16歳 (N=81)	被害	7.4%	0.0%	1.2%	1.2%	3.7%	0.0%
		加害	2.5%	1.2%	1.2%	1.2%	0.0%	0.0%
	17歳 (N=28)	被害	3.6%	3.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		加害	7.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	18歳 (N=34)	被害	2.9%	5.9%	5.9%	5.9%	2.9%	11.8%
		加害	11.8%	2.9%	2.9%	2.9%	5.9%	2.9%
男性	13~15歳 (N=77)	被害	5.2%	3.9%	5.2%	2.6%	1.3%	2.6%
		加害	2.6%	2.6%	2.6%	1.3%	1.3%	1.3%
	16歳 (N=91)	被害	7.7%	2.2%	0.0%	1.1%	1.1%	1.1%
		加害	4.4%	1.1%	1.1%	1.1%	2.2%	1.1%
	17歳 (N=23)	被害	8.7%	0.0%	0.0%	0.0%	4.3%	0.0%
		加害	8.7%	4.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	18歳 (N=19)	被害	15.8%	0.0%	5.3%	5.3%	0.0%	5.3%
		加害	5.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

なお、男性1人が年齢を回答しなかったため、年齢内訳は男性の合計人数より少ない。

⑤性的暴力

6種類の項目の中で、女性全体の被害経験では「30. 裸や性行為の写真や動画を撮りたい、あるいは送ってほしいと要求する」が最もされたことが多く9.8%であった。加害経験は「29. 裸や性行為の写真や動画をとる」が2.2%で最も多かった。一方、男性全体の被害経験は「25. いやがっているのに体を触る」と「29. 裸や性行為の写真を動画をとる」が2.8%と同率でされたことが多かった。加害経験は女性と同様に「29. 裸や性行為の写真を動画をとる」が最も多く2.8%であった。

性的暴力

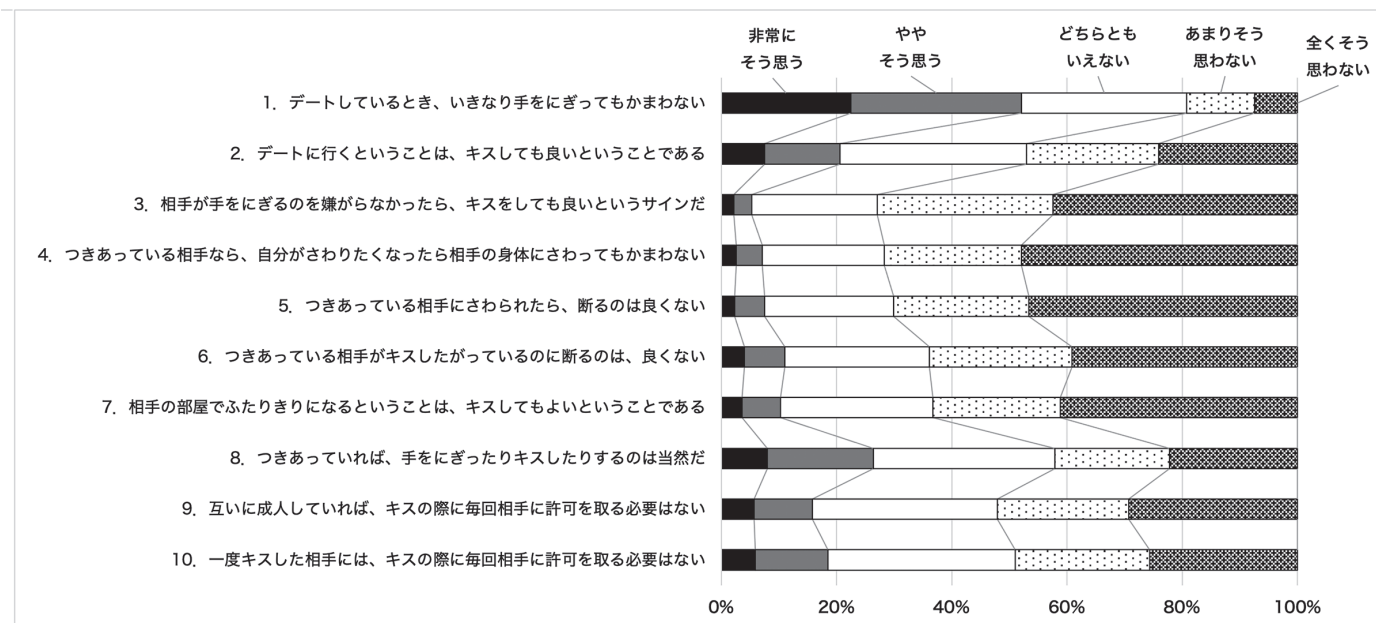
交際経験のある人		25. いやがっているのに体を触る	26. いやがっているのにキスをする	27. いやがっているのにセックスをする	28. 避妊（ひにん）に協力しない	29. 裸や性行為の写真や動画をとる	30. 裸や性行為の写真や動画を撮りたい、あるいは送ってほしいと要求する	
女性 N=225	被害	6.7%	4.9%	0.9%	0.9%	3.6%	9.8%	
	加害	1.3%	1.3%	0.4%	0.4%	2.2%	1.3%	
男性 N=211	被害	2.8%	1.9%	1.4%	2.4%	2.8%	2.4%	
	加害	0.9%	0.9%	0.9%	0.9%	2.8%	1.9%	
女性	13~15歳 (N=82)	被害	8.5%	6.1%	0.0%	1.2%	2.4%	11.0%
		加害	1.2%	2.4%	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%
	16歳 (N=81)	被害	4.9%	2.5%	0.0%	0.0%	1.2%	7.4%
		加害	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	17歳 (N=28)	被害	0.0%	3.6%	0.0%	0.0%	0.0%	7.1%
		加害	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.6%	0.0%
	18歳 (N=34)	被害	11.8%	8.9%	5.9%	2.9%	14.7%	14.7%
		加害	5.9%	2.9%	2.9%	2.9%	8.8%	8.8%
男性	13~15歳 (N=77)	被害	2.6%	1.3%	1.3%	1.3%	3.9%	1.3%
		加害	1.3%	1.3%	0.0%	0.0%	2.6%	1.3%
	16歳 (N=91)	被害	3.3%	2.2%	2.2%	3.3%	2.2%	4.4%
		加害	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%	2.2%	2.2%
	17歳 (N=23)	被害	4.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		加害	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	18歳 (N=19)	被害	0.0%	5.3%	0.0%	5.3%	5.3%	0.0%
		加害	0.0%	0.0%	5.3%	5.3%	10.5%	5.3%

なお、男性1人が年齢を回答しなかったため、年齢内訳は男性の合計人数より少ない。

(4) 性的同意の認識

性的同意の認識に関する項目の「1. デートしているとき、いきなり手をにぎってもかまわない」については、「非常にそう思う」が全体の 22.5%、「ややそう思う」が全体の 29.6% となっており、半数以上が同意を不要と考えていた。その他の項目では「非常にそう思う」または「ややそう思う」と回答する者は多くなかったが、「8. つきあっていれば、手をにぎったりキスしたりするのは当然だ」は、「非常にそう思う」が全体の 8.4%、「ややそう思う」が全体の 18.4% と、他の項目よりもそう思う者が多めであった。

性的同意に関する考え (N=965)

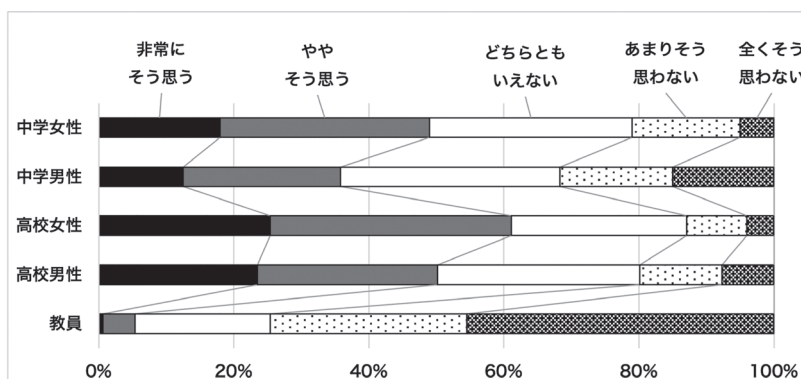


		非常に そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
1. デートしているとき、いきなり手をにぎってもかまわない						
全体 (N=965)		22.5%	29.6%	28.7%	11.8%	7.4%
中学生	女性 (N=100)	18.0%	31.0%	30.0%	16.0%	5.0%
	男性 (N=120)	12.5%	23.3%	32.5%	16.7%	15.0%
高校生	女性 (N=350)	25.4%	35.7%	26.0%	8.9%	4.0%
	男性 (N=378)	23.5%	26.7%	29.9%	12.2%	7.7%
2. デートに行くということは、キスしても良いということである						
全体 (N=965)		7.5%	13.1%	32.4%	22.9%	24.1%
中学生	女性 (N=100)	6.0%	7.0%	25.0%	27.0%	35.0%
	男性 (N=120)	4.2%	8.3%	25.8%	25.8%	35.8%
高校生	女性 (N=350)	8.0%	16.3%	32.3%	24.3%	19.1%
	男性 (N=378)	8.5%	13.5%	36.0%	20.6%	21.4%
3. 相手が手をにぎるのを嫌がらなかったら、キスしても良いというサインだ						
全体 (N=965)		2.2%	3.1%	21.8%	30.5%	42.5%
中学生	女性 (N=100)	2.0%	0.0%	16.0%	24.0%	58.0%
	男性 (N=120)	0.0%	1.7%	16.7%	29.2%	52.5%
高校生	女性 (N=350)	1.4%	3.7%	20.3%	33.1%	41.4%
	男性 (N=378)	3.4%	4.0%	26.2%	30.7%	35.7%
4. つきあっている相手なら、自分がさわりたくなったら相手の身体にさわってもかま						
全体 (N=965)		2.6%	4.5%	21.2%	23.8%	47.9%
中学生	女性 (N=100)	1.0%	2.0%	14.0%	25.0%	58.0%
	男性 (N=120)	0.8%	1.7%	13.3%	21.7%	62.5%
高校生	女性 (N=350)	2.0%	8.3%	20.0%	22.0%	47.7%
	男性 (N=378)	3.7%	2.6%	27.0%	26.2%	40.5%
5. つきあっている相手にさわられたら、断るのは良くない						
全体 (N=965)		2.3%	5.2%	22.4%	23.5%	46.6%
中学生	女性 (N=100)	1.0%	3.0%	18.0%	21.0%	57.0%
	男性 (N=120)	0.8%	4.2%	15.8%	24.2%	55.0%
高校生	女性 (N=350)	1.4%	4.0%	14.9%	25.4%	54.3%
	男性 (N=378)	3.7%	7.1%	32.8%	22.5%	33.9%
6. つきあっている相手がキスしたがっているのに断るのは、良くない						
全体 (N=965)		4.0%	7.0%	25.1%	24.8%	39.1%
中学生	女性 (N=100)	1.0%	5.0%	19.0%	21.0%	54.0%
	男性 (N=120)	1.7%	5.8%	20.8%	25.8%	45.8%
高校生	女性 (N=350)	1.7%	4.6%	18.9%	29.4%	45.4%
	男性 (N=378)	7.7%	10.3%	34.1%	21.4%	26.5%
7. 相手の部屋でふたりきりになるということは、キスしてもよいということである						
全体 (N=965)		3.6%	6.7%	26.4%	22.1%	41.1%
中学生	女性 (N=100)	0.0%	6.0%	20.0%	19.0%	55.0%
	男性 (N=120)	0.0%	0.0%	15.8%	29.2%	55.0%
高校生	女性 (N=350)	3.1%	9.1%	22.9%	24.6%	40.3%
	男性 (N=378)	5.8%	6.6%	35.2%	19.0%	33.3%
8. つきあっていれば、手をにぎったりキスしたりするのは当然だ						
全体 (N=965)		8.0%	18.4%	31.5%	19.9%	22.2%
中学生	女性 (N=100)	7.0%	13.0%	25.0%	22.0%	33.0%
	男性 (N=120)	1.7%	4.2%	30.0%	27.5%	36.7%
高校生	女性 (N=350)	8.3%	22.3%	30.6%	21.1%	17.7%
	男性 (N=378)	9.8%	21.2%	34.4%	16.7%	18.0%
9. 互いに成人していれば、キスの際に毎回相手に許可を取る必要はない						
全体 (N=965)		5.7%	10.1%	32.1%	22.8%	29.3%
中学生	女性 (N=100)	4.0%	8.0%	19.0%	26.0%	43.0%
	男性 (N=120)	2.5%	4.2%	24.2%	27.5%	41.7%
高校生	女性 (N=350)	5.1%	10.3%	36.3%	22.9%	25.4%
	男性 (N=378)	7.7%	12.2%	34.4%	20.9%	24.9%
10. 一度キスした相手には、キスの際に毎回相手に許可を取る必要はない						
全体 (N=965)		5.9%	12.6%	32.5%	23.3%	25.6%
中学生	女性 (N=100)	2.0%	8.0%	29.0%	22.0%	39.0%
	男性 (N=120)	1.7%	5.8%	24.2%	27.5%	40.8%
高校生	女性 (N=350)	6.6%	15.4%	32.3%	23.7%	22.0%
	男性 (N=378)	7.4%	13.5%	37.0%	22.2%	19.8%

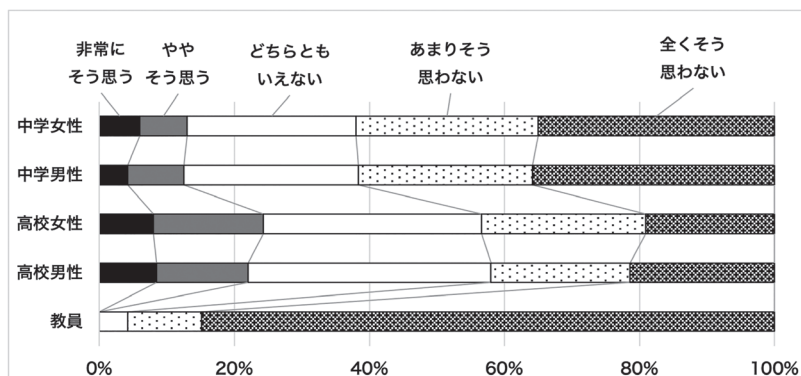
*全体の%には性別「その他」4人、「こたえたくない」13人も含む

学校種とジェンダーで分け、さらに教員の結果と比較した。全項目で、中高生は教員よりも性的同意に対する認識が低かった。高校生のほうが中学生よりも認識が低く、高校生男子の認識は最も低かった。性的同意を不要と考える者が多い「1. デートしているとき、いきなり手をにぎってもかまわない」は、中高生とも女子が男子より「非常にそう思う」、「ややそう思う」とした者が多かった。

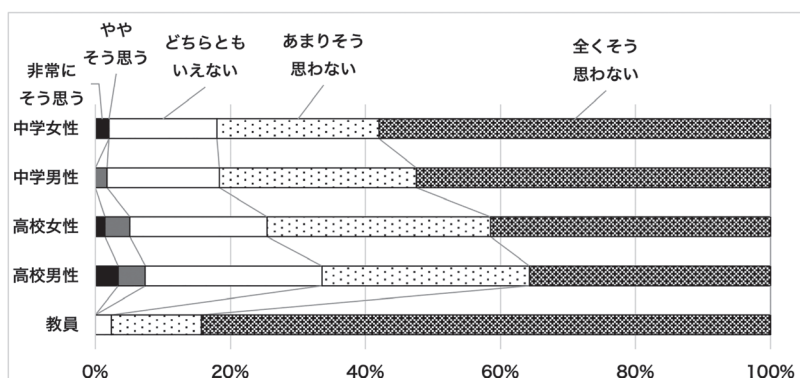
1. デートしているとき、いきなり手をにぎってもかまわない。



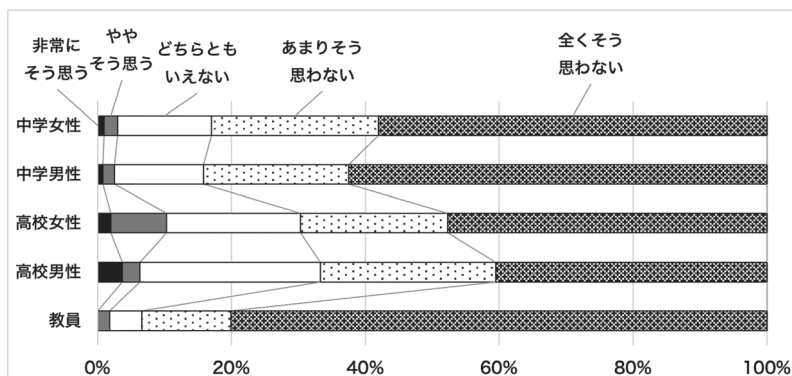
2. デートに行くということは、キスしても良いということである。



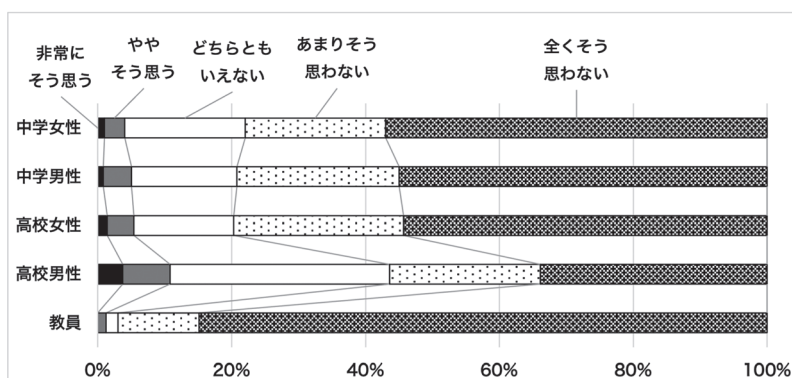
3. 相手が手をにぎるのを嫌がらなかったら、キスしても良いというサインだ。



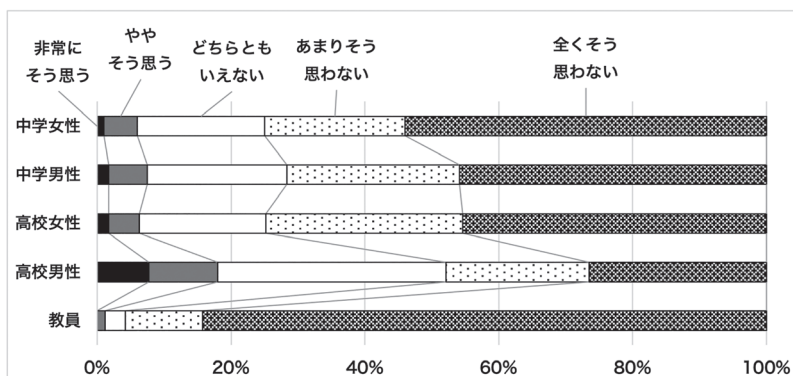
4. つきあっている相手なら、自分がさわりたくなったら相手の身体にさわってもかまわない。



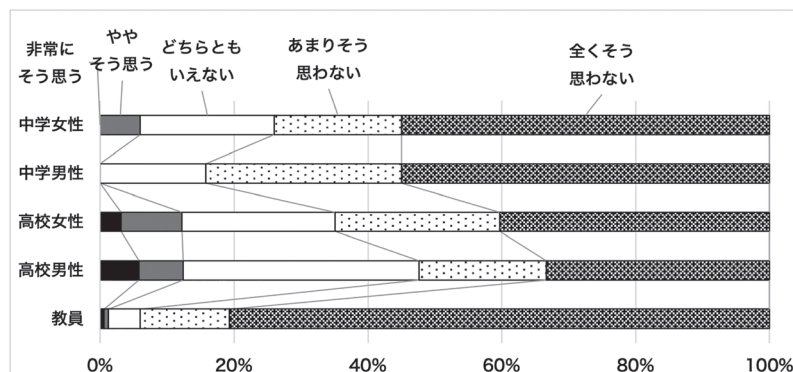
5. つきあっている相手にさわられたら、断るのは失礼だ。



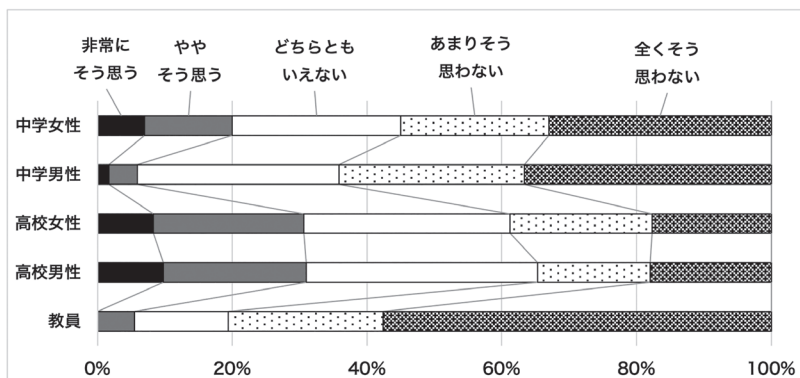
6. つきあっている相手がキスしたがっているのに断るのは、失礼だ。



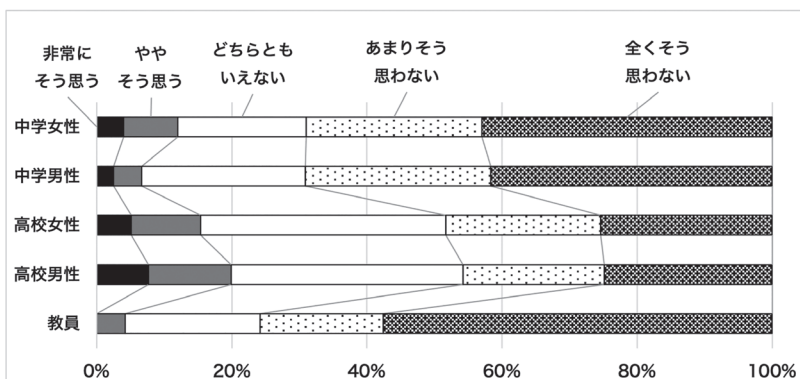
7. 相手の部屋でふたりきりになるということは、キスしても良いということである。



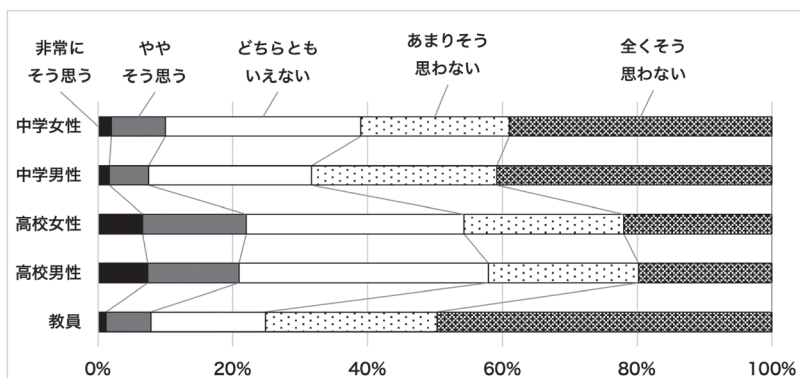
8. つきあっていれば、手をにぎったりキスしたりするのは当然だ。



9. 互いに成人していれば、キスの際に毎回相手に許可を取る必要はない。



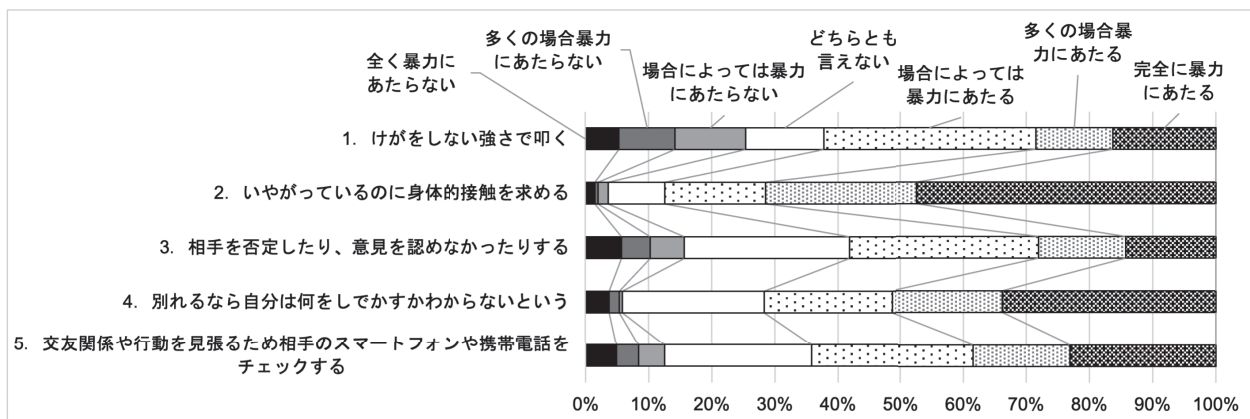
10. 一度キスした相手には、キスの際に毎回相手に許可を取る必要はない。



(5) デート DV の認識

デート DV の認識に関しては、5 項目すべてで「(完全に/多くの場合/場合によっては) 暴力にあたる」とする者が、「(全く/多くの場合/場合によっては) 暴力にあたらない」とする者より多かった。最も暴力と認識する者が多かったのは性的暴力にあたる「2. いやがっているのに身体的接触を求める」であり、最も暴力と認識しない者が多かったのは身体的暴力にあたる「1. けがをしない強さで叩く」であった。

デート DV の認識 (N=965)

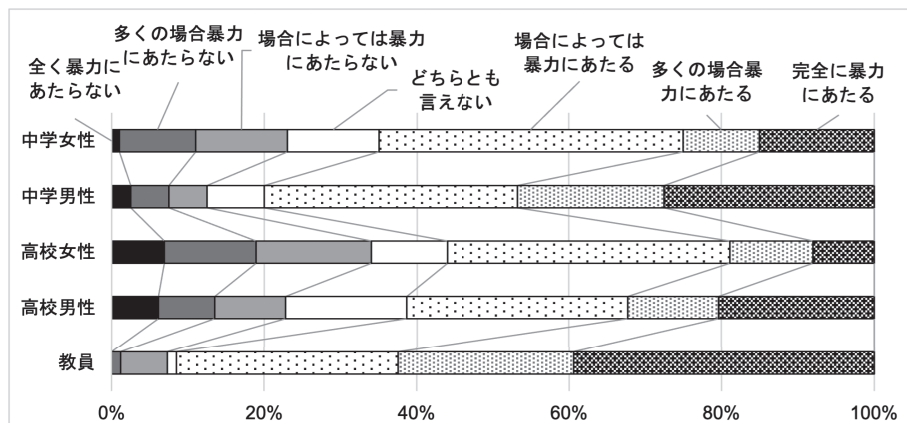


		全く暴力にあたらない	多くの場合暴力にあたらない	場合によっては暴力にあたらない	どちらとも言えない	場合によっては暴力にあたる	多くの場合暴力にあたる	完全に暴力にあたる
1. けがをしない強さで叩く								
全体 (N=965)		5.3%	8.9%	11.2%	12.4%	33.7%	12.2%	16.3%
中学生	女性 (N=100)	1.0%	10.0%	12.0%	12.0%	40.0%	10.0%	15.0%
	男性 (N=120)	2.5%	5.0%	5.0%	7.5%	33.3%	19.2%	27.5%
高校生	女性 (N=350)	6.9%	12.0%	15.1%	10.0%	37.1%	10.9%	8.0%
	男性 (N=378)	6.1%	7.4%	9.3%	15.9%	29.1%	11.9%	20.4%
2. いやがっているのに身体的接触を求める								
全体 (N=965)		1.5%	0.5%	1.6%	9.0%	16.0%	24.1%	47.4%
中学生	女性 (N=100)	0.0%	0.0%	3.0%	11.0%	16.0%	23.0%	47.0%
	男性 (N=120)	1.7%	0.0%	0.0%	6.7%	14.2%	21.7%	55.8%
高校生	女性 (N=350)	0.6%	0.3%	1.7%	7.7%	19.1%	26.9%	43.7%
	男性 (N=378)	2.6%	1.1%	1.3%	10.3%	13.2%	23.3%	48.1%
3. 相手を否定したり、意見を認めなかったりする								
全体 (N=965)		5.7%	4.6%	5.4%	26.2%	30.1%	13.8%	14.3%
中学生	女性 (N=100)	1.0%	5.0%	7.0%	32.0%	31.0%	17.0%	7.0%
	男性 (N=120)	5.0%	2.5%	6.7%	25.0%	25.0%	14.2%	21.7%
高校生	女性 (N=350)	4.0%	6.0%	5.1%	26.9%	33.1%	13.7%	11.1%
	男性 (N=378)	9.0%	4.0%	5.0%	24.1%	28.8%	13.0%	16.1%
4. 別れるなら自分は何をしでかすかわからないという								
全体 (N=965)		3.8%	1.6%	0.5%	22.4%	20.3%	17.6%	33.8%
中学生	女性 (N=100)	0.0%	1.0%	0.0%	27.0%	21.0%	15.0%	36.0%
	男性 (N=120)	4.2%	0.8%	0.0%	21.7%	15.0%	19.2%	39.2%
高校生	女性 (N=350)	3.4%	2.3%	0.9%	20.3%	24.9%	18.9%	29.4%
	男性 (N=378)	5.3%	1.3%	0.5%	23.5%	17.5%	16.7%	35.2%
5. 交友関係や行動を見張るため相手のスマートフォンや携帯電話をチェックする								
全体 (N=965)		4.9%	3.5%	4.1%	23.3%	25.7%	15.3%	23.1%
中学生	女性 (N=100)	3.0%	3.0%	6.0%	21.0%	32.0%	13.0%	22.0%
	男性 (N=120)	2.5%	1.7%	4.2%	15.8%	23.3%	18.3%	34.2%
高校生	女性 (N=350)	3.4%	4.9%	6.0%	24.3%	26.9%	17.4%	17.1%
	男性 (N=378)	7.7%	3.2%	1.9%	25.4%	24.1%	13.2%	24.6%

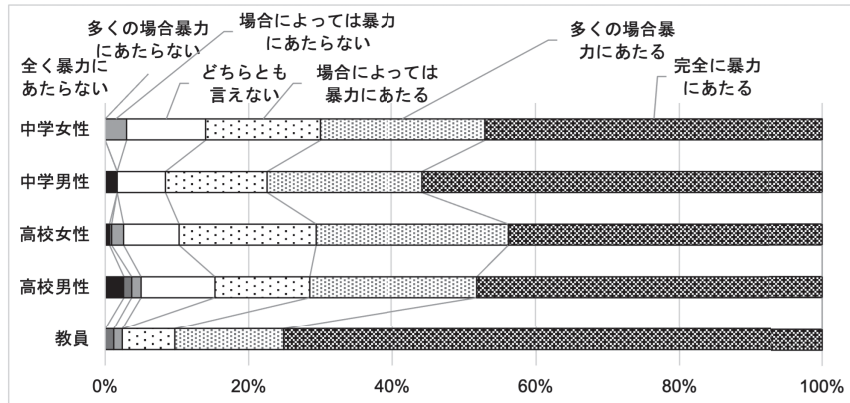
*全体の%には性別「その他」4人、「こたえたくない」13人も含む

学校種とジェンダーで分け、さらに教員の結果と比較した。全項目で、中高生は教員よりもデートDVに対する認識が低かった。身体的暴力にあたる「1. けがをしない強さで叩く」では、高校生が中学生より、女子が男子より認識が低かった。また、「完全に暴力にあたる」と回答するのは全項目で女子より男子が多く、「3. 相手を否定したり、意見を認めなかったりする」以外の4項目で高校生より中学生が多かった。

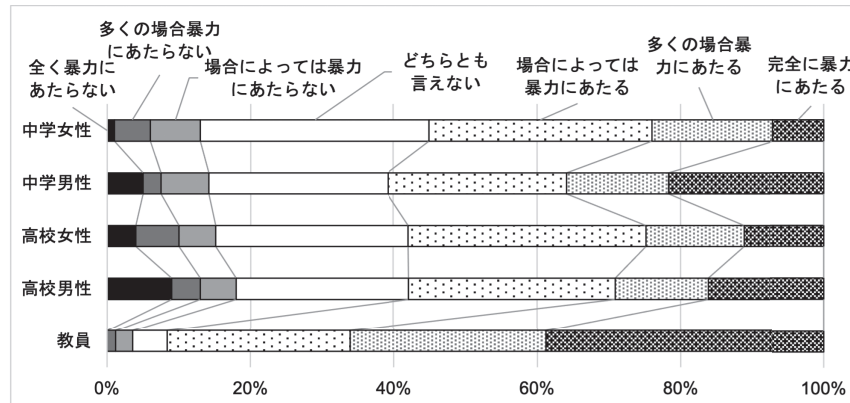
1. けがをしない強さで叩く



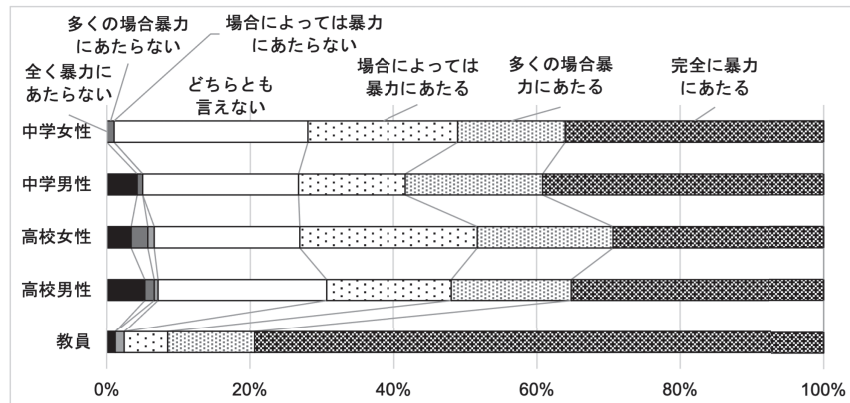
2. いやがっているのに身体的接触を求める



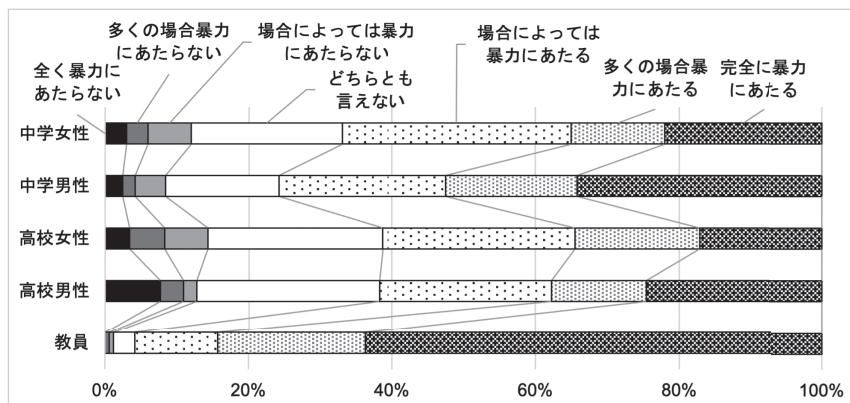
3. 相手を否定したり、意見を認めなかったりする



4. 別れるなら自分は何をしでかすかわからないと言う



5. 交友関係や行動を見張るため相手のスマートフォンや携帯電話をチェックする



IV. 考察

1. 学校での「生命の安全教育」とデート DV 予防教育の実態と課題

(1) 「生命の安全教育」について

「生命の安全教育」は、回答者が勤務する学校の少なくとも3割弱で実施されており、「保健体育の授業」「学年集会」「総合的な学習の時間」などが指導機会に充てられることが多く、「養護教諭」「教科担任」「外部講師」「学級担任」が指導するケースが多かった。

「生命の安全教育」実施上の困りごとについて、教材の内容のほか、学校内の教員間の温度差や、外部専門家に依頼するときの予算や講師選択に関する内容が散見された。課題としては、指導時間の不足、自身の知識不足、教職員の無理解などが多く挙げられた。

「生命の安全教育」が必要である理由では、小中高いずれの学校種でも「生命の安全教育」で学ぶ内容が知識として人生で大切なものであるとの理由が最も多かった。次いで多かったのは、児童生徒を取り巻く環境に関する理由であった。とりわけ中高においては、生徒が性被害に遭う可能性を強く感じている様子がうかがえた。

(2) デート DV 予防教育について

デート DV 予防教育は、高等学校では回答者が勤務する学校の少なくとも7割程度で実施されていたが、中学校では半数強であり、小学校では5%にも満たなかった。「生命の安全教育」と同様に、「保健体育の授業」「総合的な学習の時間」「学年集会」が指導機会に充てられることが多かった。実施者については、「生命の安全教育」と比べると、「外部講師」が非常に多く、「学級担任」はそれほど多くない点が特徴であった。

小学校、中学校では、デート DV 予防教育が必要な理由は、「生命の安全教育」の場合と同じく、デート DV 予防教育で学ぶ内容が人生において必要であるという理由が多かった。一方で高等学校においては、生徒が実際に被害にあっていたり、交際におけるトラブルを目にしたことがある、そのための対処として必要であるという理由が1番多かった。小学校ではまだ必要ないかもしれないが、中高では必要であるという理由が2番目に多かった。

課題としては、指導時間の不足、適切な教材がないこと、自身の知識不足などが多く挙げられた。

2. デート DV の被害・加害実態

認定 NPO 法人エンパワメントかながわでは、2016 年にもデート DV 予防教育を受講した中学生、高校生、大学生 2,825 名を対象にデート DV の被害・加害経験に関する実態調査を実施している。この時には、デート DV 予防教育の終了後に対面個別で調査票を配布し調査を実施している。今回の調査の対象は中学生および高校生で、調査はデート DV 予防教育実施前に Google Forms への回答という方法で実施している。そのため、対象者の年齢層や実施方法に違いがあり単純には比較できないが、違いをふまえた上で、2016 年の調査と 2024 年の調査の共通点や差異や、2024 年の調査結果の特徴について考察することとした。

(1) 性別欄の回答について

「性別」欄の回答結果であるが、2016 年の調査では記入式になっており、有効回答 2,122 人のうち、「女性」は 1,321 人、「男性」は 801 人の計 2,122 人であった。一方、2025 年の調査では、「性別」欄は「女性」、「男性」、「その他」、「こたえたくない」の 4 項目から構成されており、有効回答 965 人のうち、「女性」は 450 人、「男性」は 498 人、「その他」は 4 人、「こたえたくない」は 13 人であった。選択肢の違いもあるが、2016 年には男女以外の回答がなく、2024 年では男女以外の回答があったということは、この数年間で男女以外の選択肢も表明しやすくなった可能性がある。文部科学省 (2021) の生徒指導提要では、性的マイノリティに関する課題と対応が新たに追記されている。また、2023 年には、「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律」が公布されるなど、学校や一般社会においても性的マイノリティへの存在の認知や理解が少しずつではあるが進んでいる可能性がある。

(2) 交際相手の有無について

2016 年調査では、交際経験があると答えたのは全体で 1,329 人 (62.6%)、女性は 894 人 (67.7%)、男性は 435 人 (54.3%) であった。2024 年度調査では、交際経験があると答えたのは全体で 442 人 (45.8%) で、女性で 225 人 (50.0%)、男性で 211 人 (42.4%) であった。また、男女別、年齢別の交際相手の比率をみると、2016 年度調査では、男女ともに 12～15 歳、16 歳、17 歳、18 歳、19 歳、20 歳以上のいずれの年齢層においても交際相手があると答えた者が 50%以上であった。2024 年の調査で交際相手がある者が 50%を越えたのは 15 歳女子、17 歳と 18 歳の男女であった。これらの結果から、2024 年調査は 2016 年調査より、青少年の交際経験は低下している可能性がある。近年、青少年の性行動の不活発化が指摘されているが (片瀬, 2019)、それと合致した結果がであるといえる。

(3) 被害経験と加害経験の実態

まず、1つでも被害経験がある人は、2016年の調査では、全体(N=1,329)で38.9%、女性(N=894)では44.5%、男性(N=435)では27.4%であった。2024年では、全体(N=436)で40.7%、女性(N=225)では45.8%、男性(N=211)では35.1%であった。男性でやや増えた感はある。1つでも加害経験があると回答した人は、2016年調査では全体(N=1,329)で20.8%、女性(N=894)では21.0%、男性(N=435)では20.5%であった。2024年では、全体(N=436)では26.6%、女性(N=225)では27.1%、男性(N=211)では26.1%であった。しかし、2016年ではデートDV予防教育後に調査が行われたことを勘案すると、社会的望ましさが働いた可能性もあり、ほぼ変化がないともいえる。

次に、2024年の暴力の被害経験および加害経験における暴力の種類の数値をみると、男女ともに、どの年齢層でも5個未満の人が多く、10個以上と回答している人も数%存在し、1種類の暴力行為だけでなく、いくつかの種類を重複して受けたり、行使したりしている人がいることが明らかになった。

さらに、暴力の種類毎の被害経験では、5種類の暴力(行動の制限、精神的暴力、経済的暴力、身体的暴力、性的暴力)のうち、2016年も2024年も行動の制限の被害経験が最も比率が高かった。また、行動の制限の6項目の中でも、「他の異性と話をしないと約束する」「返信が遅いと怒る」「友人関係を制限する」という行為が上位3項目である点も共通していた。加害者は被害者の行動を制限し、孤立させることによって、よりコントロールしやすい状況を作ることが明らかになっている。このような被害経験は、女性の13～15歳という低年齢層においても3割が経験しており、決して低い数値とは言えない。行動の制限は束縛という言葉で表現されることもあるが、この束縛を愛情表現と勘違いする者もいることから、早期から暴力への認識を高める取り組みが必要である。

一方、暴力の種類毎の加害経験では、5種類の暴力のうち、2016年は女性では行動の制限や精神的暴力の加害経験の比率が、男性では精神的暴力の加害経験の比率が高かった。2024年では被害経験と同様に男女ともに行動の制限の比率が高かった。

3. 性的同意とデートDVについての教員と中高生の意識

教員と比較すると、中高生は性的同意に対する認識もデートDVに対する認識も低く、これらにアプローチする予防教育の必要性が明らかとなった。予防教育において性的同意の重要性を解説すると「ドラマやマンガで肯定的に描かれていることが罪になるとは知らなかった」と驚く中高生も多い。予防教育においては、不同意性交等罪、不同意わいせつ罪といった法律的な知識に加え、同意の取り方・示し方、不同意の示し方やその場合の対応といったスキルを具体的に教授することが望まれる。

また、高校生のほうが中学生よりも性的同意やデートDVに関する認識が低いことも示された。これらの認識の低さは被害・加害リスクの高さと関連すると推測できる。高校生は中学生よりも恋人との交

際や性行動が身近になるため、高校生に対する予防教育が喫緊の課題といえる。性的同意については特に高校生男子の認識が低いことが示されたが、恋愛において男子は依然として能動性を期待されているため、相手の同意を得ないまま行動し加害につながるものが懸念される。また、近年、女性に対する暴力へは啓発が進み、許容されなくなっているが、男性の暴力被害、女性の暴力加害は許容されがちで、異性カップルにおいては男性被害 - 女子加害が多いという調査結果も示されている（上野, 2024）。特に男性の性的被害は被害として認識されにくい、女性被害同様に重大なダメージをもたらすことが明らかになってきている（Bates & Taylor, 2023）。男性も被害にあうという視点からも、男女問わず自身および相手の「同意」の有無を大切にすることを予防教育において伝える必要がある。

デート DV に関しては女子のほうが男子より暴力と認識しにくい傾向があった。今回の調査では、「交際の相手に対して以下の行為を行った場合、それは『暴力』にあたると思いますか」と尋ねた。そのため、自分がその行為の主体であった場合の判断が反映されていると考えられ、女子は男子より自分の行為をデート DV と認識しにくいのだと解釈できる。これは上述した女性の暴力加害は許容されがちという指摘（上野, 2024）と合致する。予防教育においては、ジェンダーを問わず加害者にも被害者にもなりうるという視点を欠いてはならない。

4. 今後の課題

今回の中高生を対象とした調査は、2016年に実施した調査からの変更点がいくつかあった。まず、「性別」欄は「女性」、「男性」、「その他」、「こたえたくない」の4項目から構成されていたという点である。近年では、身体の性別、心の性別、どちらの性別を交際相手として選ぶかなど、性別については男女だけでなく多様性があることが認識されつつある。この点を考慮して性別欄を変更した。しかし、我々はデート DV と聞くと無意識のうちに異性愛カップルを連想し、男性から女性、女性から男性への暴力に限定して考えがちである。このような思考により、LGBTQ におけるデート DV の実態をなきものとして扱ってしまうことが懸念される。今後は性的指向等も考慮したデート DV の実態や予防の検討が必要である。

次に、本調査では、被害・加害の経験だけでなく、被害も加害も経験したという選択肢を設けた。Whitaker et al. (2007) は、親密な二者間の暴力の50%は相互的であると述べており、Billingham (1987) によれば、大学生の半数以上が被害と加害の両方を経験しているということである。赤澤他 (2017) では、相手を孤立させるという暴力において双方向群が被害者群より被害経験は高かったが、精神的ダメージは被害者群の方が高いという結果が示されている。このように同じように暴力被害を受けていても、双方向性があるかどうかによって暴力の影響が異なる可能性がある。今回の分析では、2016年調査と比較するため被害・加害経験について言及しているが、今後は、加害のみ、被害のみ、被害と加害の両方を経験している者の比率や暴力経験の差異についても詳細に検討する必要がある。その際、暴力の種類による暴力の影響の差異も併せて検討することにより、デート DV の実態だけでなく、

暴力がもたらすダメージについても明らかにしたい。

最後に、デート DV に関する調査では性的な項目も含まれることから、10 代の学生への調査を断られることもあるが、今回中高生対象の調査では中学生 224 人、高校生 741 人の計 965 人が調査に同意し参加してくれた。また、小中高の教員においても、多忙の中 165 人が調査に協力してくれた。このような調査を実施できたことにより、今後のデート DV の予防や対応に役立てられる資料を作成することが出来た。ここに改めて調査への参加者にお礼を申し上げます。

V. 引用文献

- Akazawa, J. (2011). The current situation and future challenges for research on sexuality in Japanese heterosexual couples. *Feminism & Psychology*, 21 (4) , 522-528.
- 赤澤淳子 (2022). 児童を対象とした性暴力防止プログラムの現状と課題 人間学研究, 21, 1-10.
- 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・下村淳子・松並知子 (2021). デート DV 第 1 次予防プログラムの開発と効果検証 - 高校生を対象として 心理学研究, 92, 248-256. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.92.20008>
- 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子 (2017). デート DV における暴力の頻度と精神的ダメージジェンダーと暴力の双方向性への着目— 福山大学人間文化学部紀, 17, 56-68
- Bates, E. A., & Taylor, J. C. (Eds.) (2023). *Domestic violence against men and boys: Experiences of male victims of intimate partner violence*. Routledge.
- Billingham, R.E. (1987). Courtship violence: The patterns of conflict resolution strategies across seven levels of emotional commitment. *Family Relations*, 36, 283-289.
- Cornelius, T.L. & Resseguie, N. (2007). Primary and secondary prevention programs for dating violence: A review of the literature. *Aggression and Violent Behavior*, 12, 364-375. doi:10.1016/j.avb.2006.09.006
- 石川由香里・土田陽子・中澤智恵 (2016). ジェンダー規範の性行動に及ぼす影響と性教育の課題. 活水論文集, 59, 19-35.
- 片瀬一男 (2019). 第 8 回「青少年の性行動全国調査」の概要 一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会 (編)「若者の性」白書—第 8 回青少年の行動全国調査報告— (pp. 9-28) 小学館
- 文部科学省 (2021). 生命の安全教育について https://www.mext.go.jp/a_menu/danjo/anzen/index2.html
- 内閣府 (2020). 性犯罪・性暴力対策の強化の方針 https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/seibouryoku/pdf/policy_02.pdf
- 内閣府 (2024). 男女間における暴力に関する調査 (令和 5 年度調査) https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/r05/r05danjokan-5.pdf
- 認定 NPO 法人エンパワメントかながわ (2017). デート DV 白書 VOL.5—全国デート DV 実態調査報告書— https://notalone-ddv.org/wp-content/uploads/2018/01/ddv_hakusho_vol5.pdf
- 中澤智恵 (2019). 知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題. 一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会編「若者の性」白書—第 8 回 青少年の性行動全国調査報告— 小学館, pp.89-104.

- Rispens, J., Aleman, A., & Goudena, P.P. (1997). Prevention of child sexual abuse victimization: A meta-analysis of school programs. *Child Abuse & Neglect*, 21, 957-987.
- 下村淳子・赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子（2021）. 高等学校におけるデート DV 防止教育の現状と課題 - 養護教諭が対応した被害相談との関連 愛知学院大学心身科学部紀要, 17, 27-36.
<https://doi.org/10.34513/00003417>
- 上野淳子 (2024). 被支配感を考慮した成人前期における IPV 被害のジェンダー差 心理臨床学研究, 41(6), 548-557.
- Whitaker, D.J., Haileyesus, T., Swahn, M., & Saltzman, L. (2007). Differences in frequency of violence and reported injury between relationships with reciprocal and nonreciprocal intimate partner violence. *American Journal of Public Health*, 97, 941-947.

【調査実施責任者】

NPO 法人デート DV 防止全国ネットワーク

代表理事 中田慶子

<https://notalone-ddv.org/organization>

【調査アドバイザー・執筆者】

福山大学人間文化学部心理学科 教授 赤澤淳子

四天王寺大学社会学部社会学科 准教授 上野淳子

関西大学文学部総合人文学科 教授 多賀太

特定非営利活動法人デート DV 防止全国ネットワーク

全国でデート DV 防止や支援に関わる活動をしている機関、団体、個人に対して、予防教育の普及を促進するための調査研究や政策提言、当事者支援のための連携、啓発活動等に関する事業を行い、デート DV のない社会の実現に寄与することを目的に活動しています。2018 年 11 月法人化。

団体ホームページ：デート DV 情報発信サイト notAlone <https://notalone-ddv.org/>

調査報告書 2025 デート DV と予防教育の実態と意識

～教員・中高生調査

発行：2025 年 3 月 1 日

発行者：特定非営利活動法人デート DV 防止全国ネットワーク

ddvbousinet@yahoo.co.jp

令和 6 年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製複写（コピー）することは、著作権上認められている場合を除き、禁じられています。本書のデータや文書を引用する場合は、必ず出典を明記いただき、当団体へ連絡をお願いいたします。

